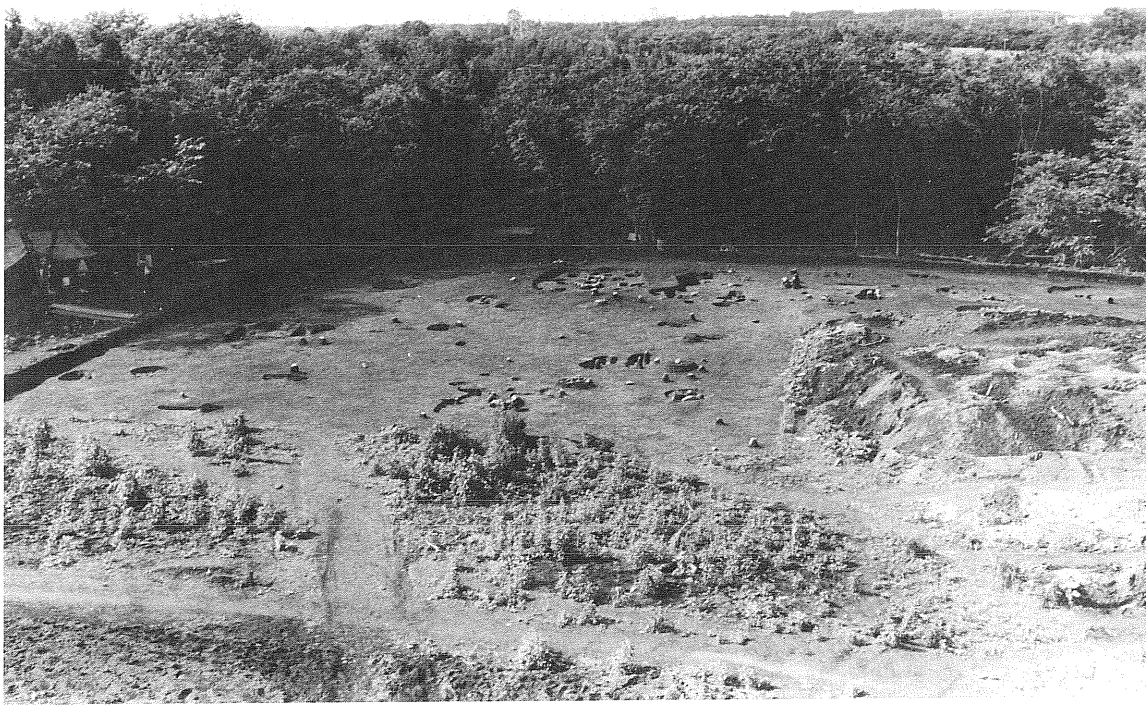
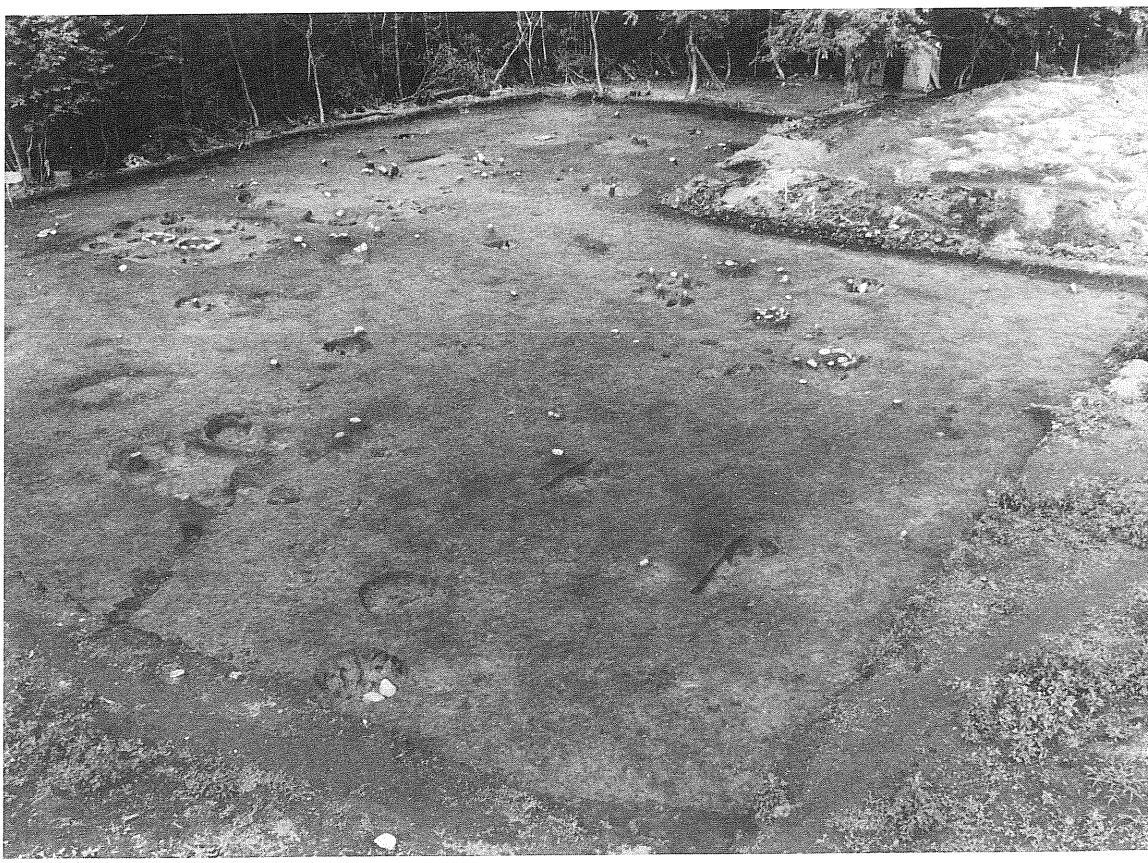
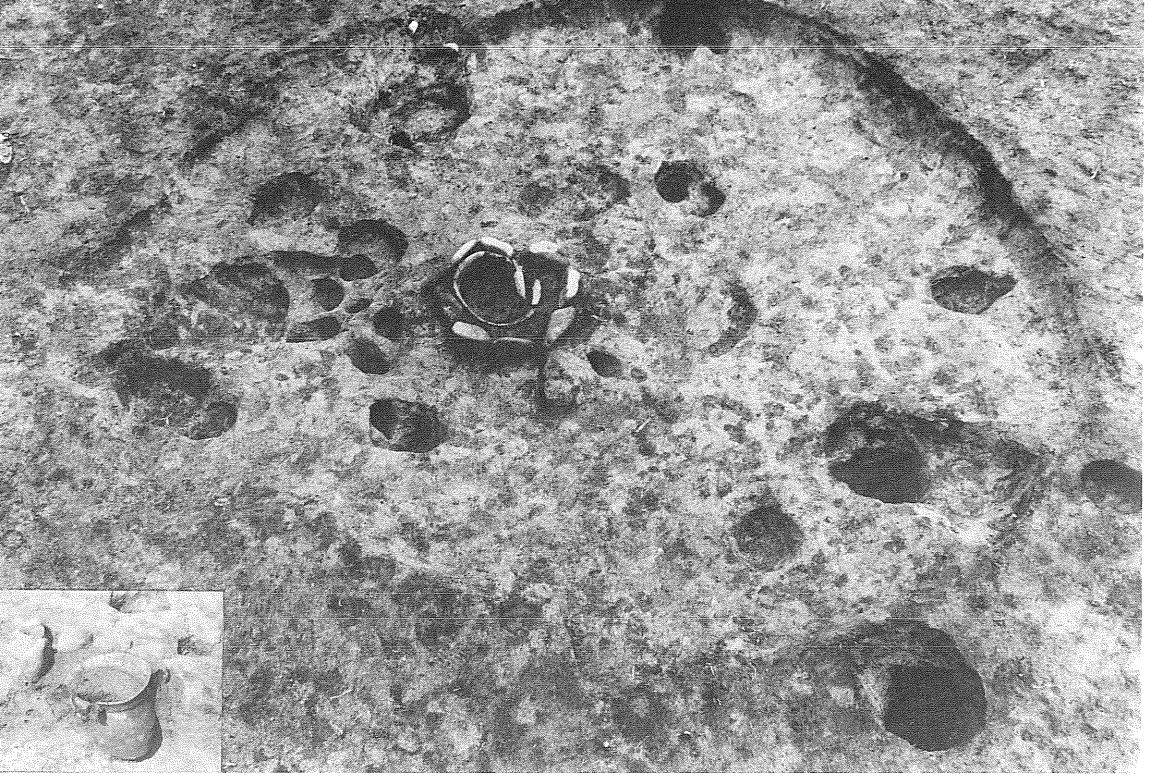


遺跡全景（南→）

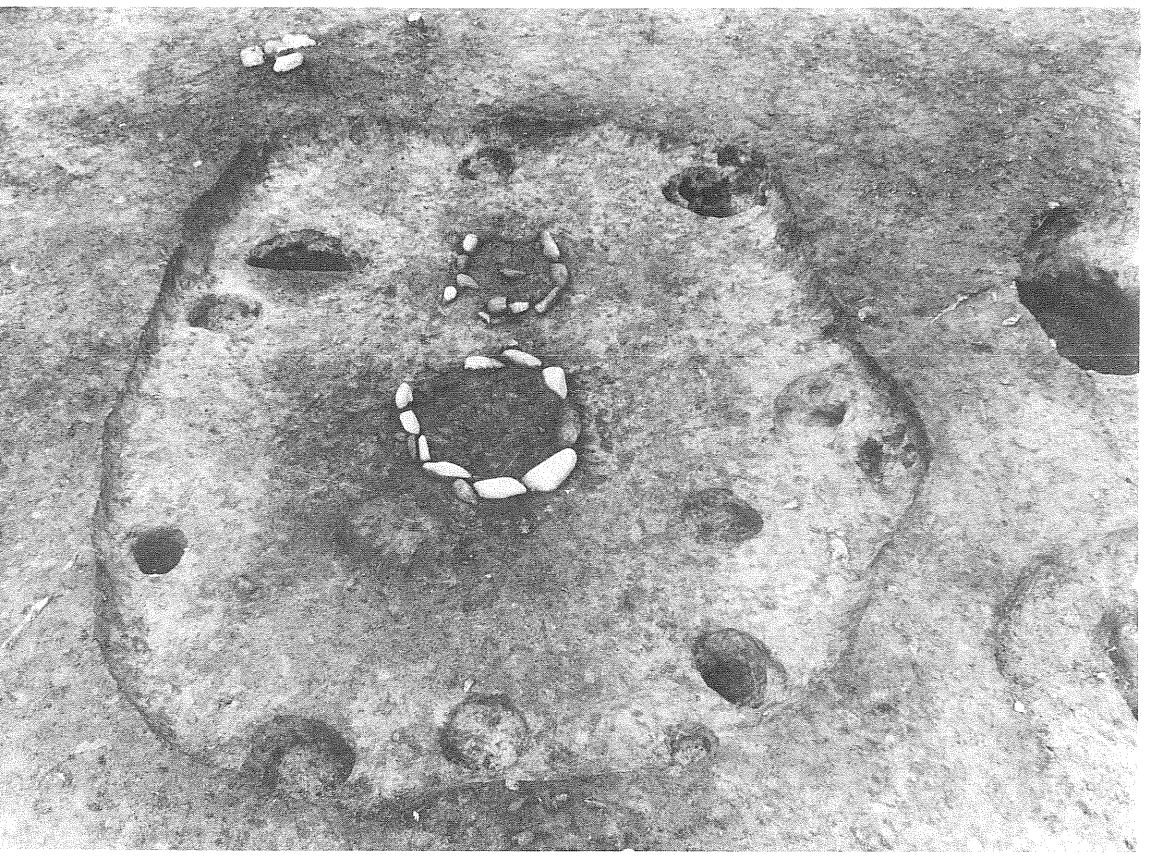


遺跡全景（西南→）

図版 1

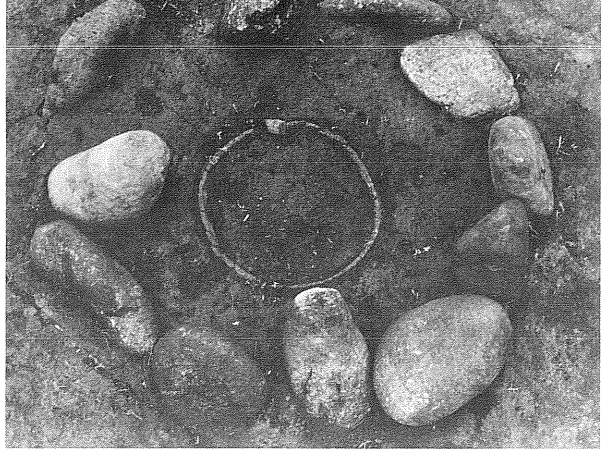


1号住居跡（北→）



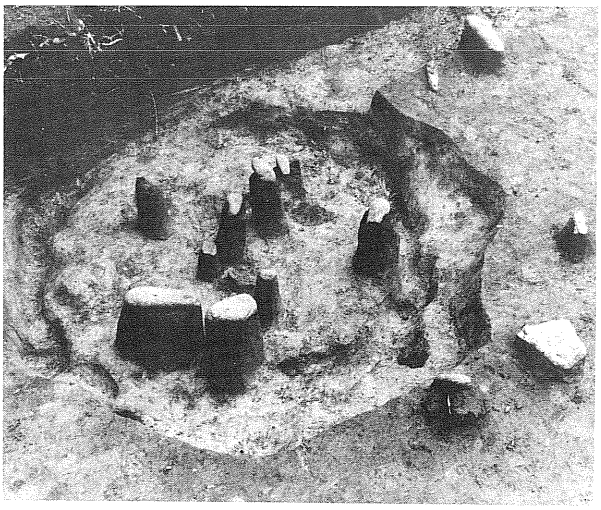
2号住居跡（南→）

図版 2

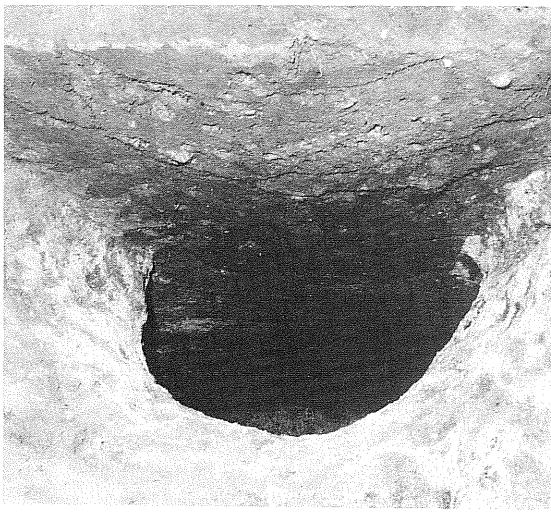


1 号炉跡（南→）

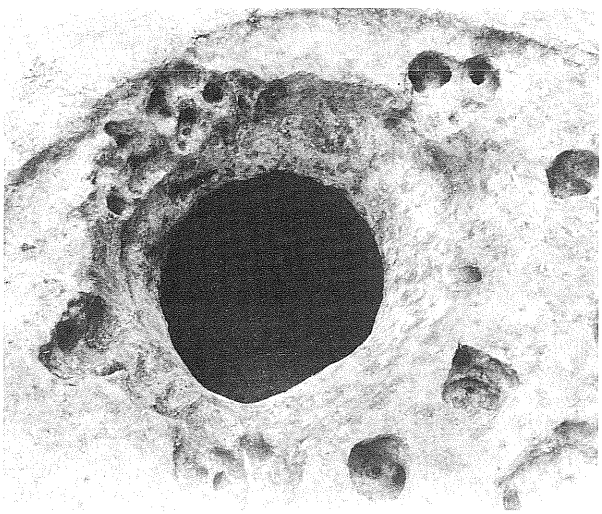
2 号竪穴遺構（南→）



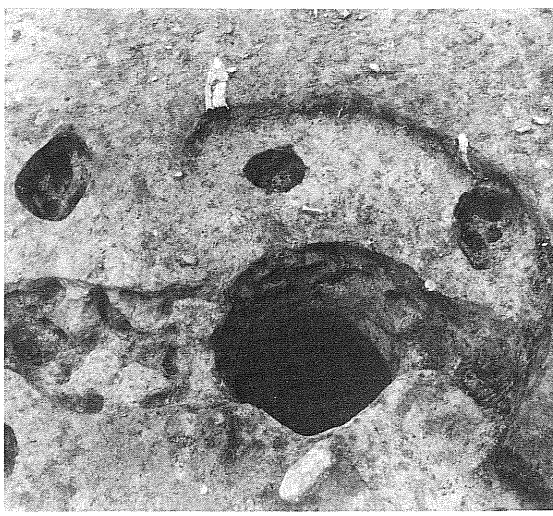
3 号竪穴状遺構（北東→）



1 号土坑（西→）

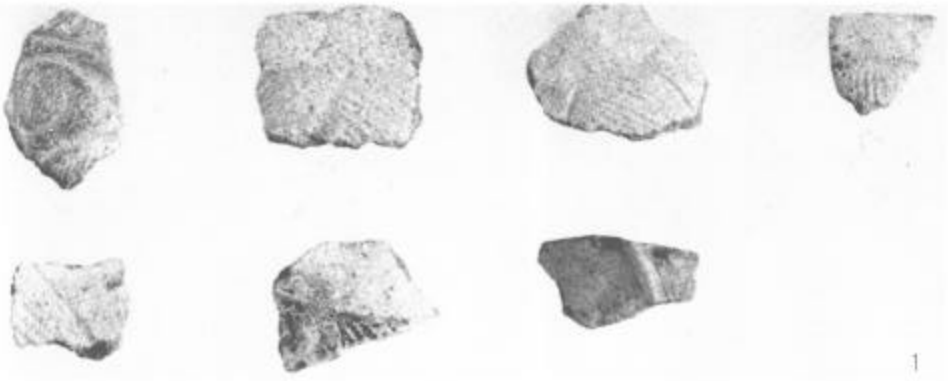


2 号土坑（南→）



4 号土坑

図版 3



1

2

3

4

5

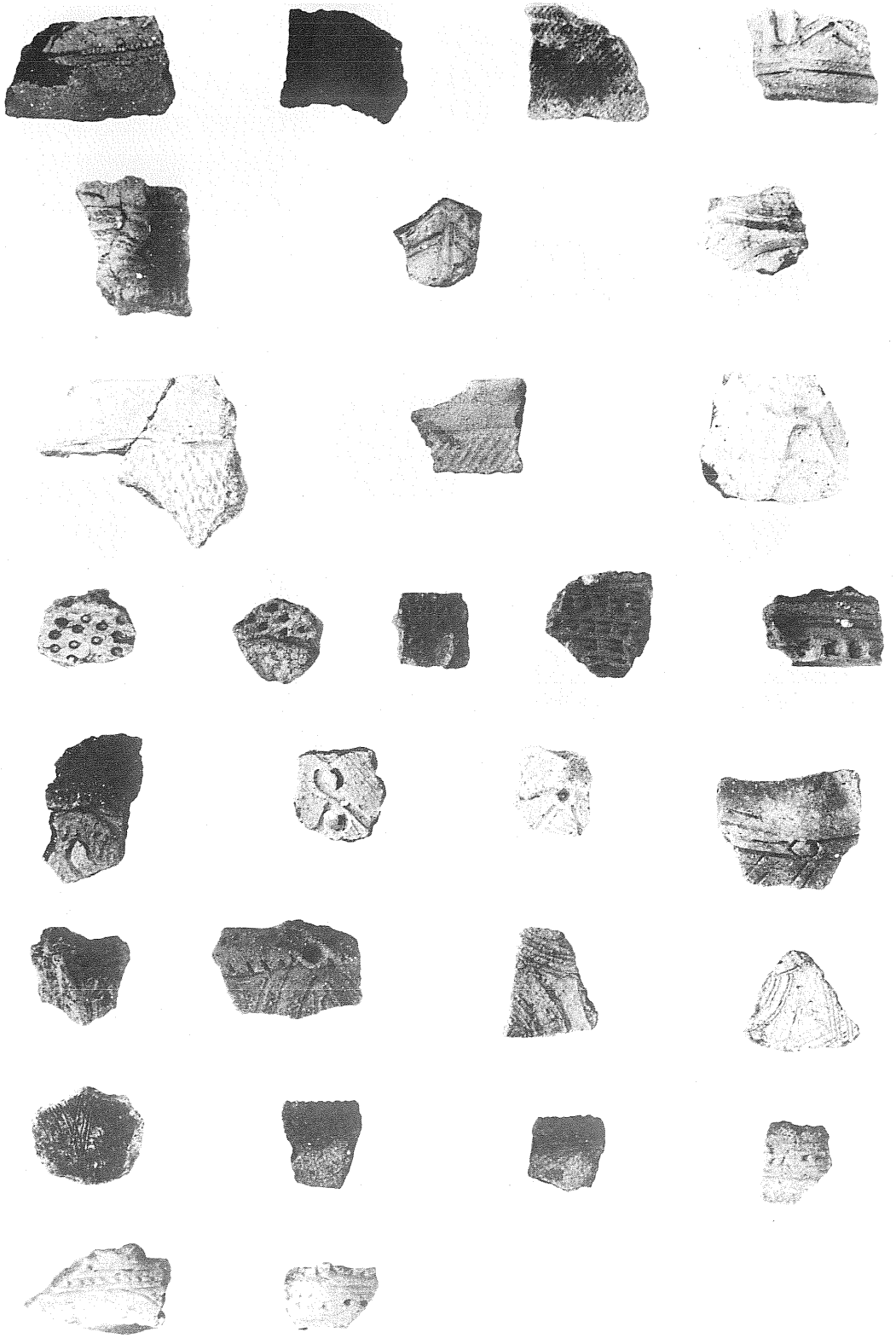
6

7

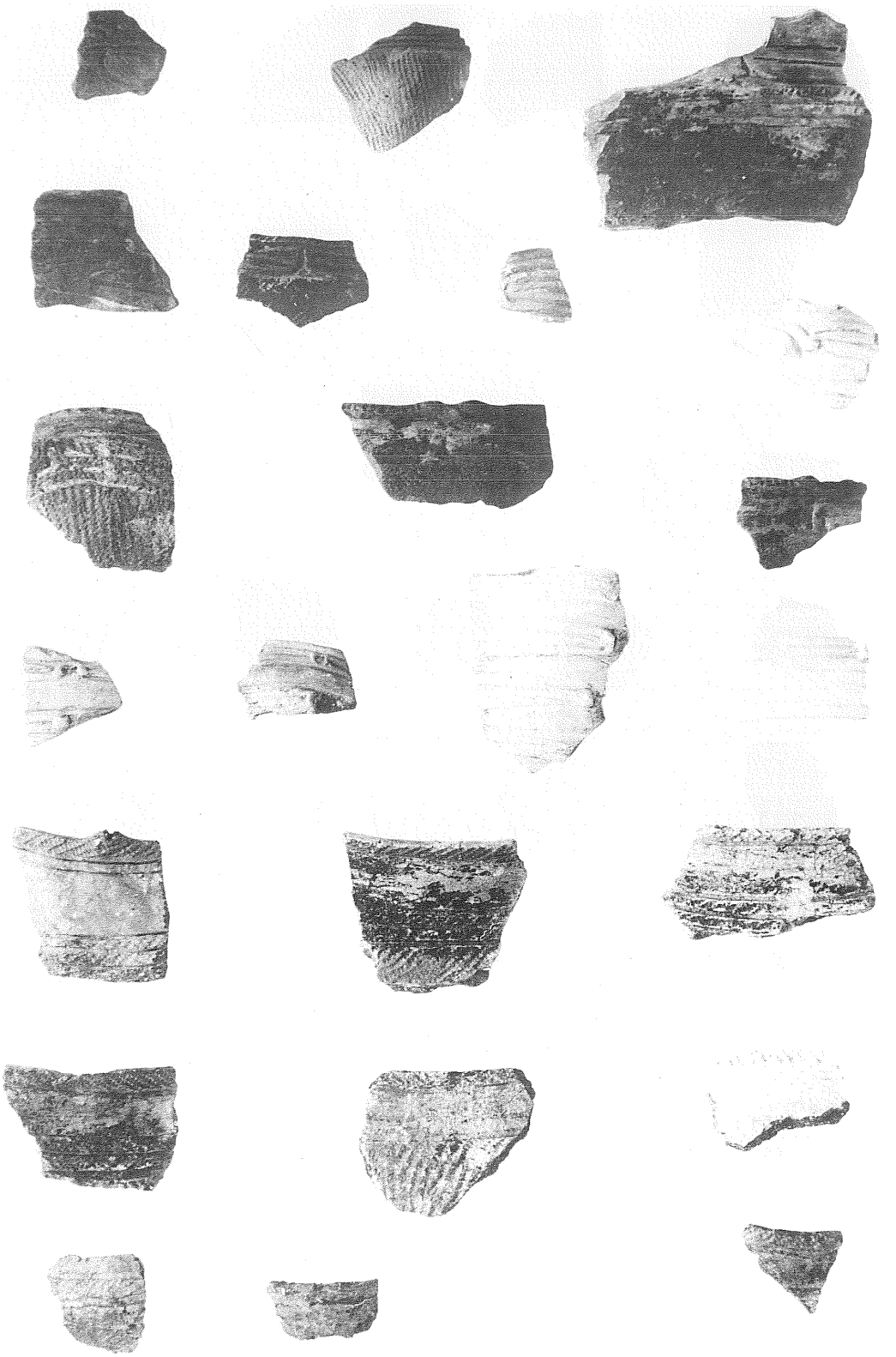
8

1　2号住居跡出土土器
2　1号住居跡炉埋設土器
3　1号炉跡埋設土器
4　1号ピット内出土土器
5～8　遺構外出土土器

図版 4

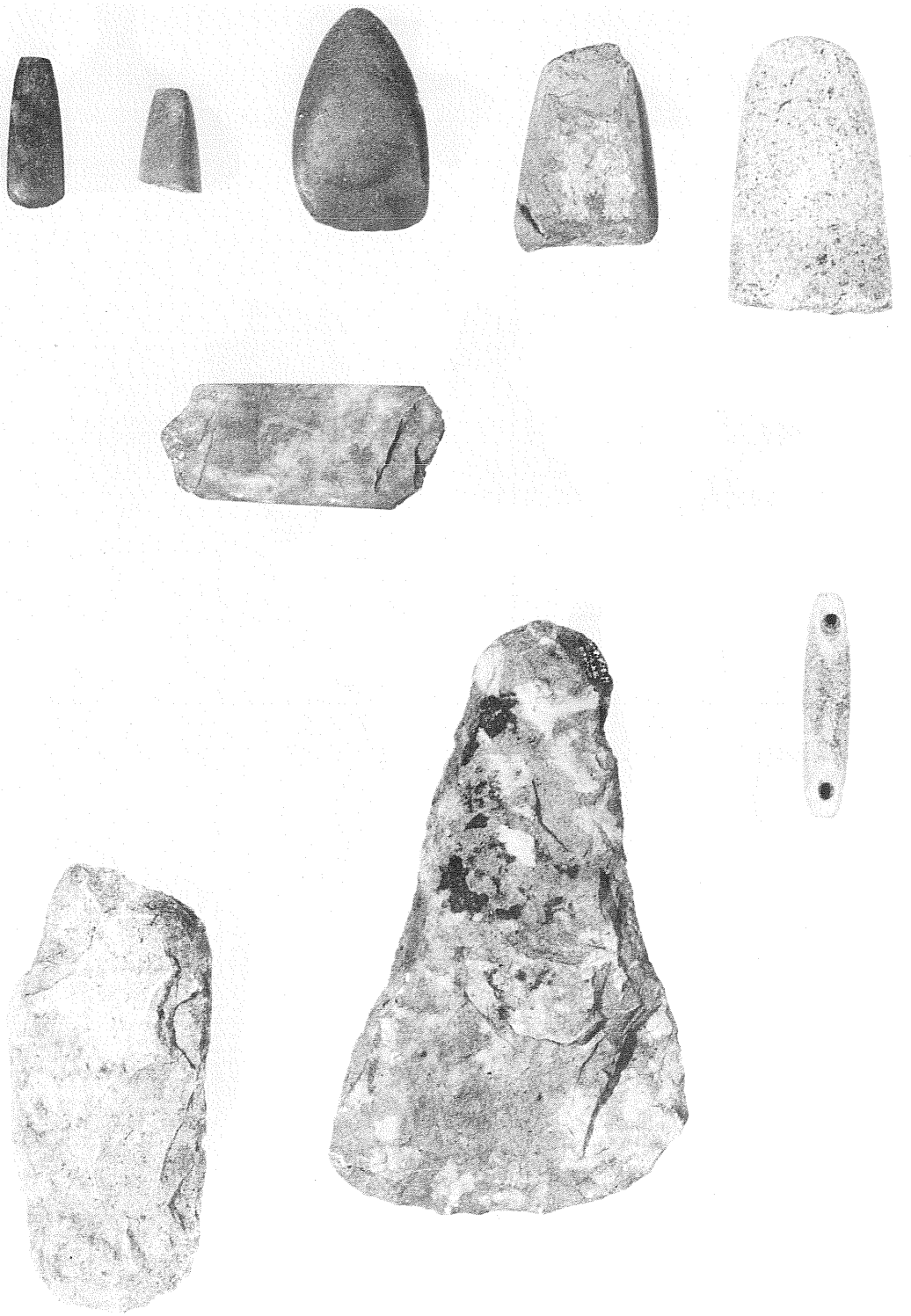


図版 5　遺構外出土土器

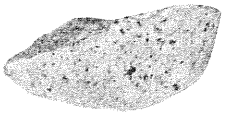


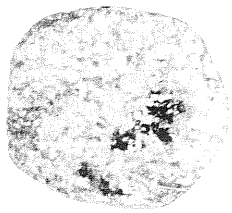
図版 6　遺構外出土土器

図版 7　遺構外出土石器

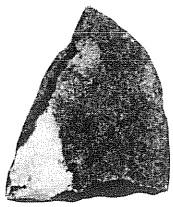


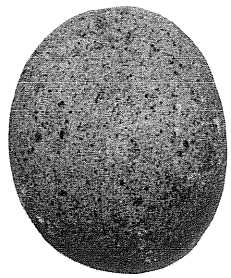
図版 8　遺構外出土石器

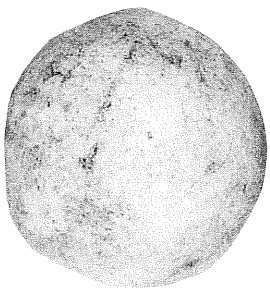


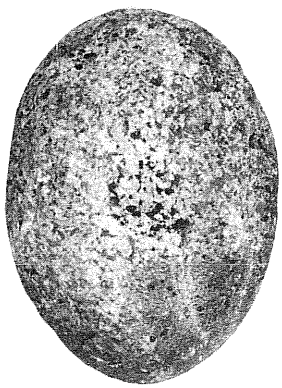


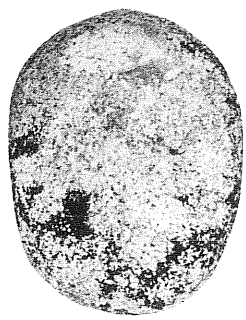
遺構内出土石器











遺構外出土石器

図版 9

野形遺跡

上北手御所野
野形遺跡
雨池通
48.8
48.3
45.2
46
40
50.6
51.1
48
43.8
33.3
30
46.0
65.7
60
69.8
41.8
46.7
80
44.9
0
100m

第１図　遺跡周辺の地形

遺跡の概観

御所野集落のはずれから国道13号線にぬける道路がある。遺跡はその南東にある標高52m 程の独立した台地上に位置する。

遺跡の大半は、昭和51年度以前にブルドーザーによって破壊されている。昭和51年度に秋田考古学協会の手で一部調査が実施され、平安時代後半の住居跡、赤褐色土器の焼成施設と考えられる窯跡を検出している。今回の調査では、それらも含めてさらに広範囲に調査を行った。結果、住居跡3軒、赤褐色土器の焼成施設と考えられる窯跡、土坑等を検出した。

遺構と遺物

1号住居跡（第2図）

調査区の南西部に位置する。南側⅓程は、昭和51年に調査されている。今回の調査で全容を把握した。

フランは、東西4.9m 、南北4.6m のほぼ方形を呈する住居跡である。壁高は25～30cmで床面からほぼ垂直に立ち上がる良好なものである。壁直下には深さ15cm程の周溝が認められた。覆土は褐色土、黒褐色土、暗褐色土が主体である。上層の褐色、黒褐色土に包含される土器は、ブルドーザーによって壊され、すべて細片である。ピットは床面に多くみられるが、柱穴となるものか不明で、壁のコーナー部と辺上に検出したものが柱穴と考えられる。カマドは、前回の調査でも検出しているが、新たに南壁西寄りに検出された。煙道部が外に1.1m 程のびる。天井部は落ちている。前庭部には径60cm、深さ21cmのピットがある。袖部は確認できなかった。床面は堅くしまり、非常に良好である。中央北東部にある大きなピットには貼り床が認められた。

出土遺物（第3図）

覆土、床直上、床から赤褐色土器、須恵器壺・甕が出土した。覆土出土の土器は多数あるが、細片で復元できなかった。

赤褐色土器

1・3・4は覆土上層から出土した。底部切り離しは回転糸切りで再調整はない。2・5・7・8・10～13は北西部の床面直上の褐色土から一括出土した。いずれも回転糸切り無調整である。6は西側床面、9はヒットから出土した。いずれも回転糸切り無調整である。

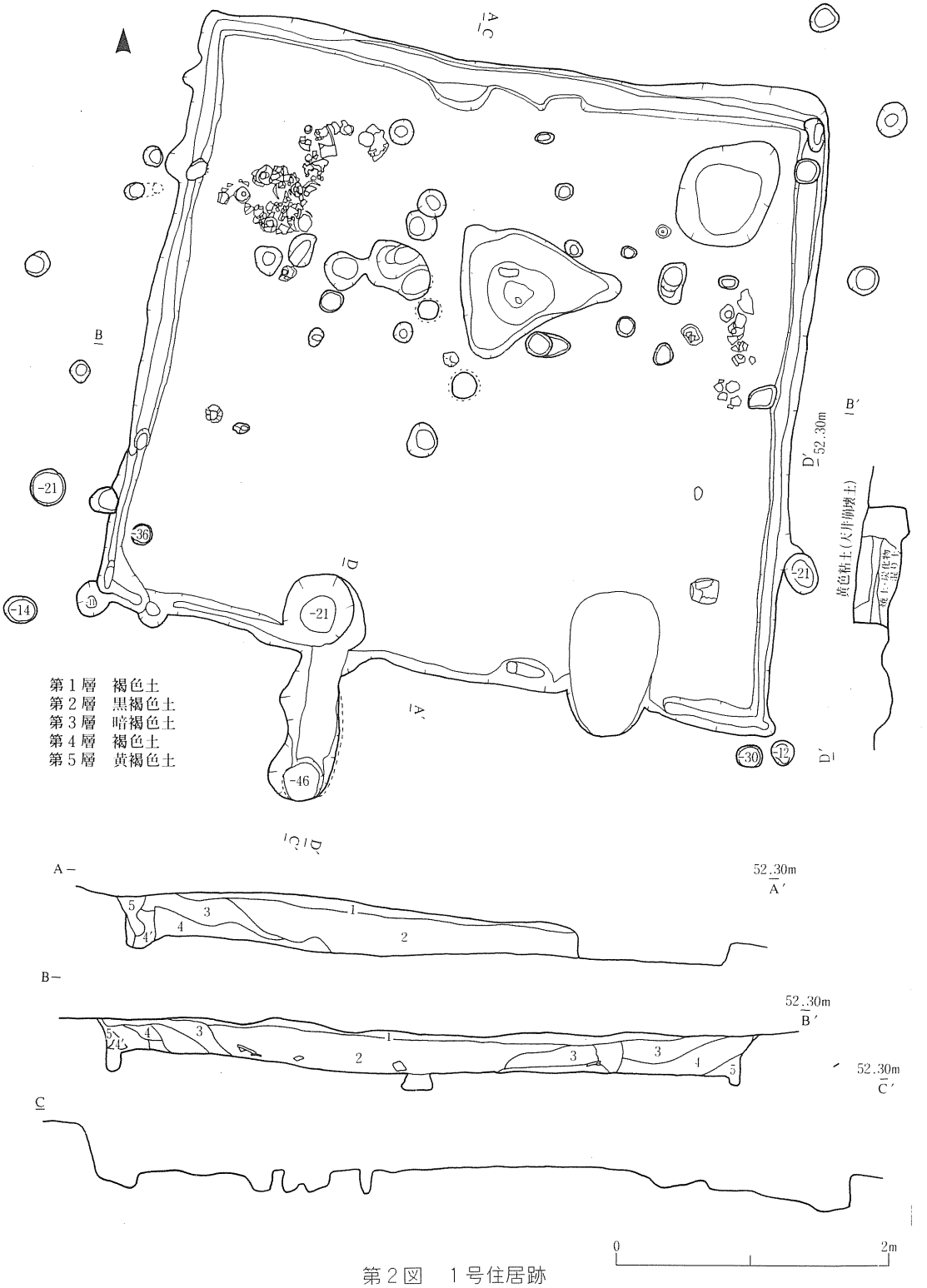
須恵器

壺：14は口縁部破片で「焼きぶくれ」がみられる。16は頸、口縁部が欠損する。胴部には斜方向にカキ目痕がみられる。

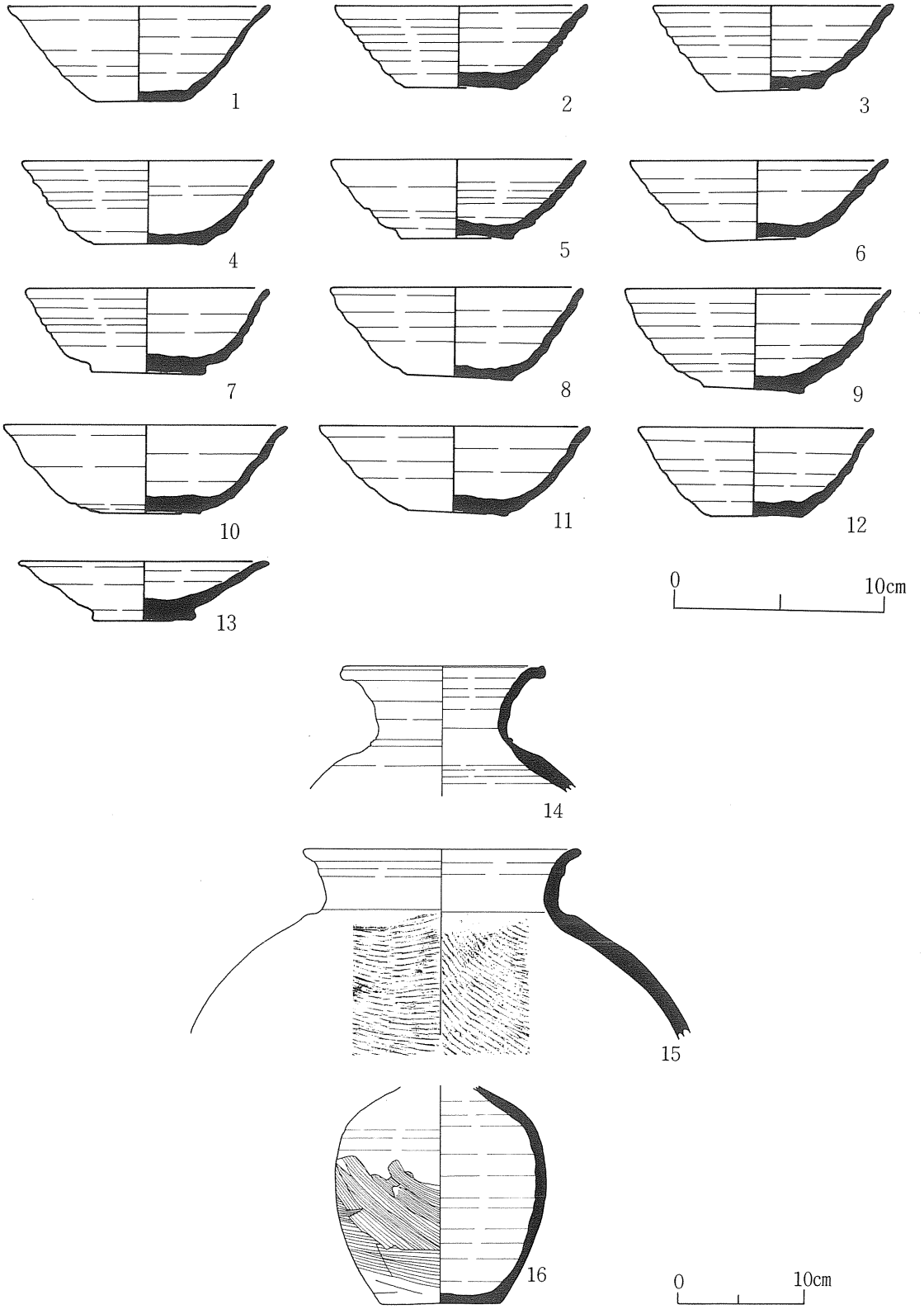
甕：15は内外面ともに条線状の当て具痕、叩き板痕がある。焼成良好である。他に破片が多く出土しているが接合しない。

2号住居跡（第4図）

調査区の中央部で検出された。


第1層　褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　褐色土
第5層　黄褐色土
黄色粘土（天井崩壊土）
52.30m
0
2m

第2図　1号住居跡



第３図　１号住居跡出土遺物

プランは、長軸5.9m 、短軸4.6m の長方形を呈する火災住居跡である。火災のため床が部分的に堅く焼きしまる。炭化した材が北側に多く遺存しており北壁の一部に板材が直立状態で残っていた。壁直下にある巾10～15cm、深さ５cmの周溝はこの板材を矢板状に打ち込むための遺構と思われる。壁高は、約40cmで床から垂直に立ち上がり良好である。ピットは、多く検出されているが主柱穴となるものは北壁下に４個、床面に４個、南壁中央部下に１個、西壁中央に１個が規則的に並び、深さ、形状、位置などから考えられ、いずれにも柱痕跡が残っている。特に北西コーナー部、北壁コーナー部直下に検出した柱穴には、炭化した柱が遺存していた。カマドと思われるのは、南壁西部に確認された南に長さ1.8m 、巾1.4m と大きく張り出すもので段がつく。底部、側壁が堅く焼けている。規模から窯との重複も考えられたが明確でない。覆土は大きく４層に分かれる。１層は黒色土でブルドーザーにつぶされ、一部削られている。その下層に黒褐色土、褐色土が堆積しており特に最下層には、炭化物、焼土が多量に混入している。遺物は土師器甕、赤褐色土器の破片が数点出土しているが図上復元できるものはない。

３号住居跡（第５図）

調査区の中央南側で検出された。

プランは、東西3.9m 、南北3.9m の方形を呈する。１号土坑、昭和51年調査の窯跡と重複している。１号土坑との関係は、土坑を埋めてから住居跡を構築していることが切り合いから確認された。壁高は、30～40cmで床面からほぼ垂直に立ち上がる。周溝は、北・西壁下に部分的に検出された。覆土は、レンズ状に堆積し、黒色土、褐色土を主体とする。土層はブルドーザーにふまれ堅くなり包含される遺物は細かく壊われ、もろい。ピットは、数個住居跡の内外に確認されているが、外の壁沿いに規則的に並ぶものが柱穴と考えられる。カマドは東壁の南寄りに設けられている。袖部はほとんど遺存しない。煙道は屋外に1.5m 程のびており、天井部が明瞭に残る。前庭部は浅く掘り込まれ、焼土、炭化物が広く分布する。また土師器甕の破片が多く出土した。南東コーナー部にあるピットには炭化物、焼土が多く混入しており、あるいは灰捨ての施設とも考えられる。床面は平坦で堅くしまり、部分的に焼面がみられる。

出土遺物（第10図８～24）

覆土、床面から赤褐色土器、土師器甕、土錘などが出土した。

土師器

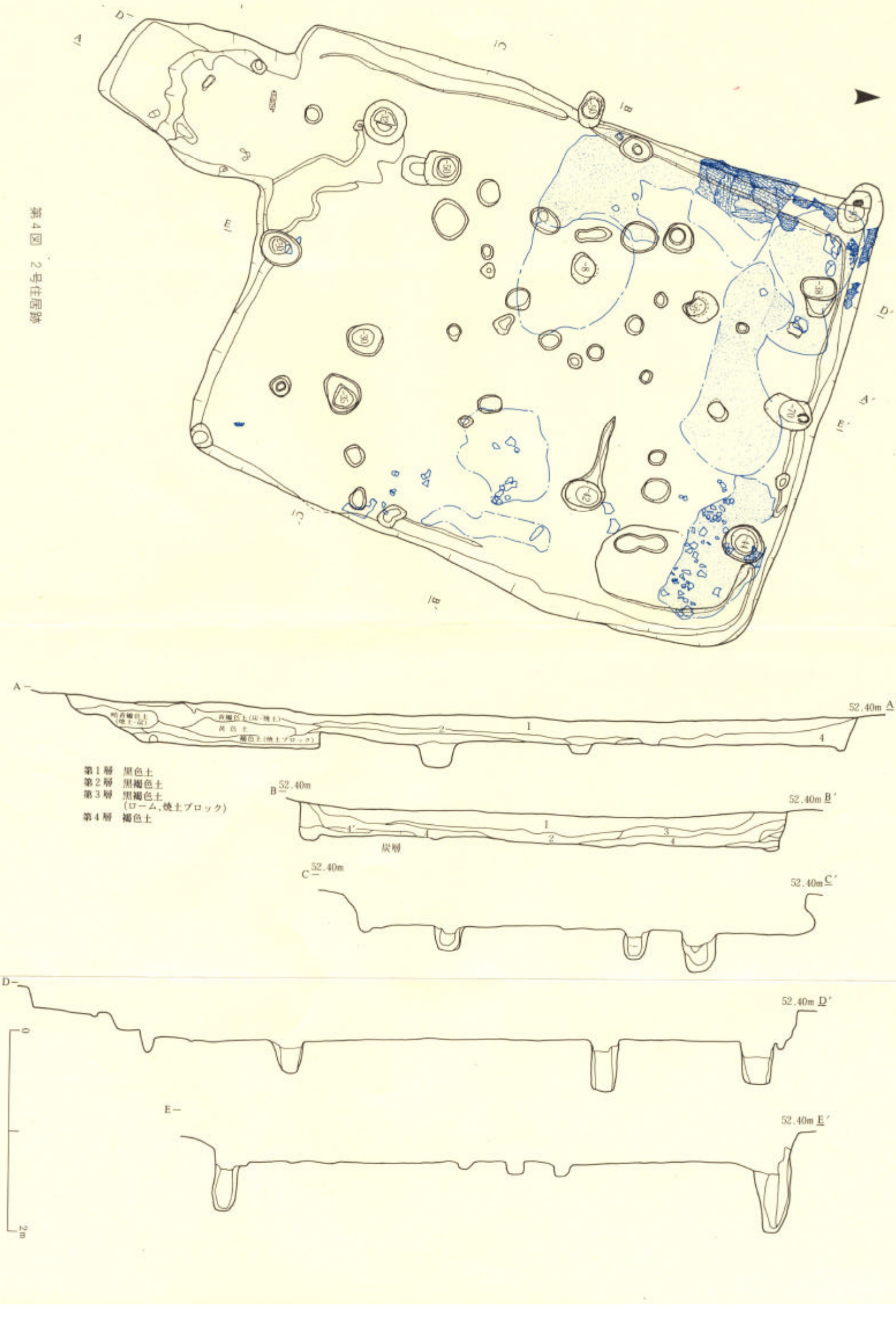
14は小形の甕である。焼成良好で、内面に横方向にカキ目痕、外面には刷毛目痕がみられる。

赤褐色土器

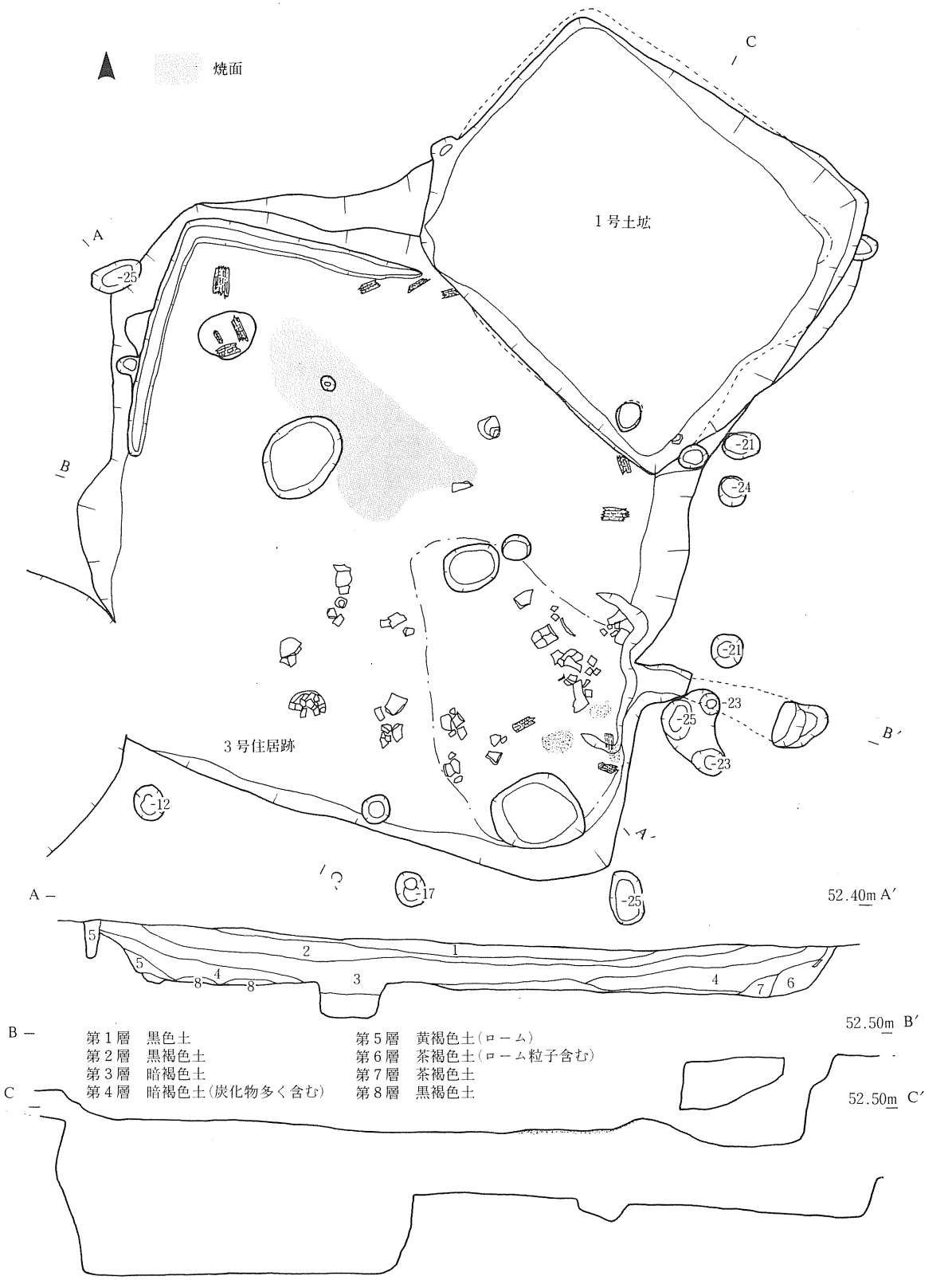
８～10・12・13は覆土出土の坏である。底部切り離しはすべて回転糸切り無調整である。11は床面出土で同様に回転糸切り無調整である。他にも多く出土したが復元不可能である。

土製品

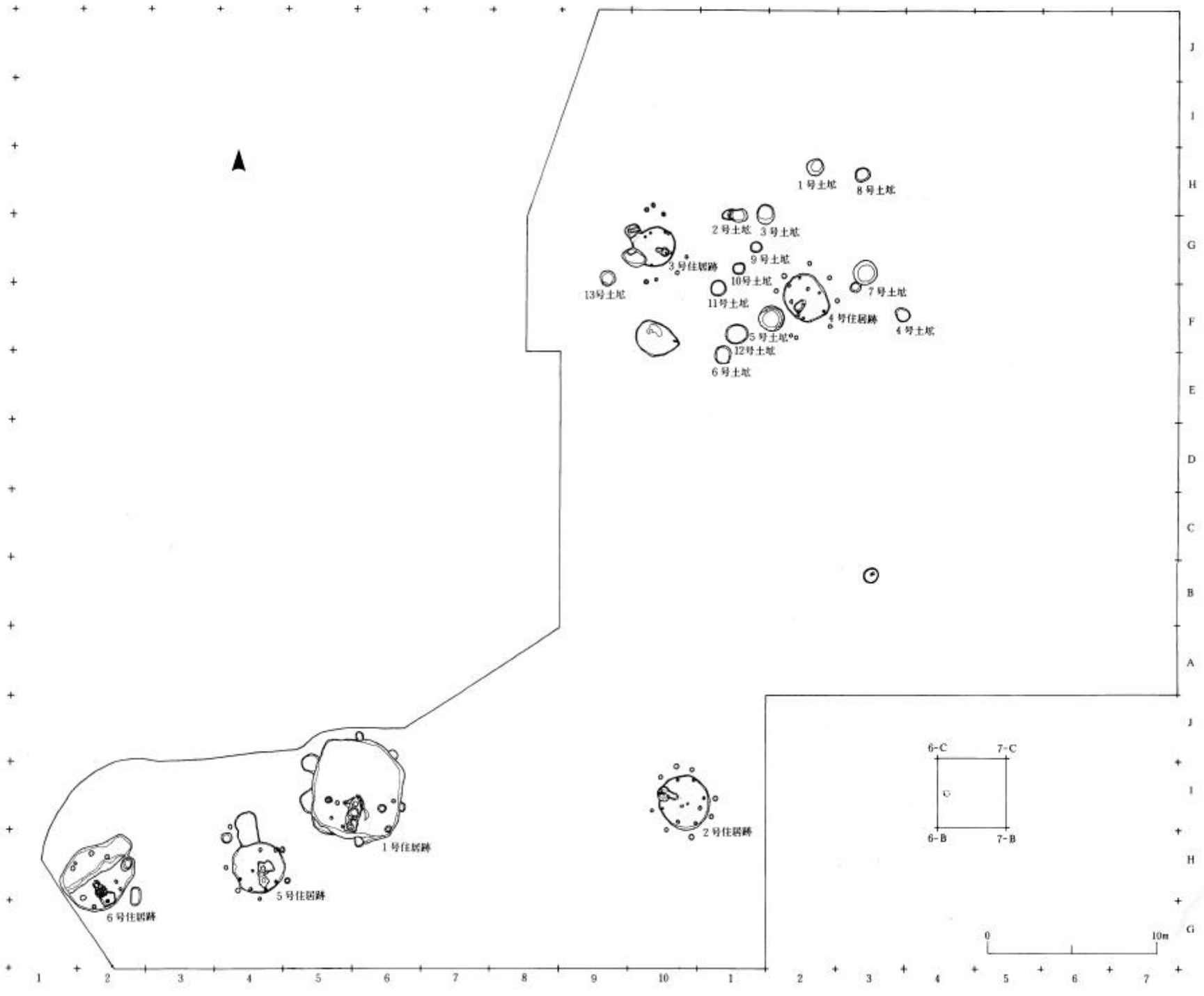
土錘


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
52.40m
第1層　黒色土
第2層　黒褐色土
第3層　黒褐色土
(ローム,焼土ブロック)
第4層　褐色土
炭層
0
2m

第4図　2号住居跡



第5図　3号住居跡，1号土坑


1号土坑
8号土坑
2号土坑
3号土坑
9号土坑
3号住居跡
10号土坑
13号土坑
11号土坑
7号土坑
4号住居跡
4号土坑
5号土坑
12号土坑
6号土坑
1号住居跡
5号住居跡
2号住居跡
6号住居跡
6-C
7-C
6-B
7-B
0
10m
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

第26図　遺構配置図

15～27は長さ３～４cmの小形で、径３mm程の孔を有し、赤褐色を呈する。

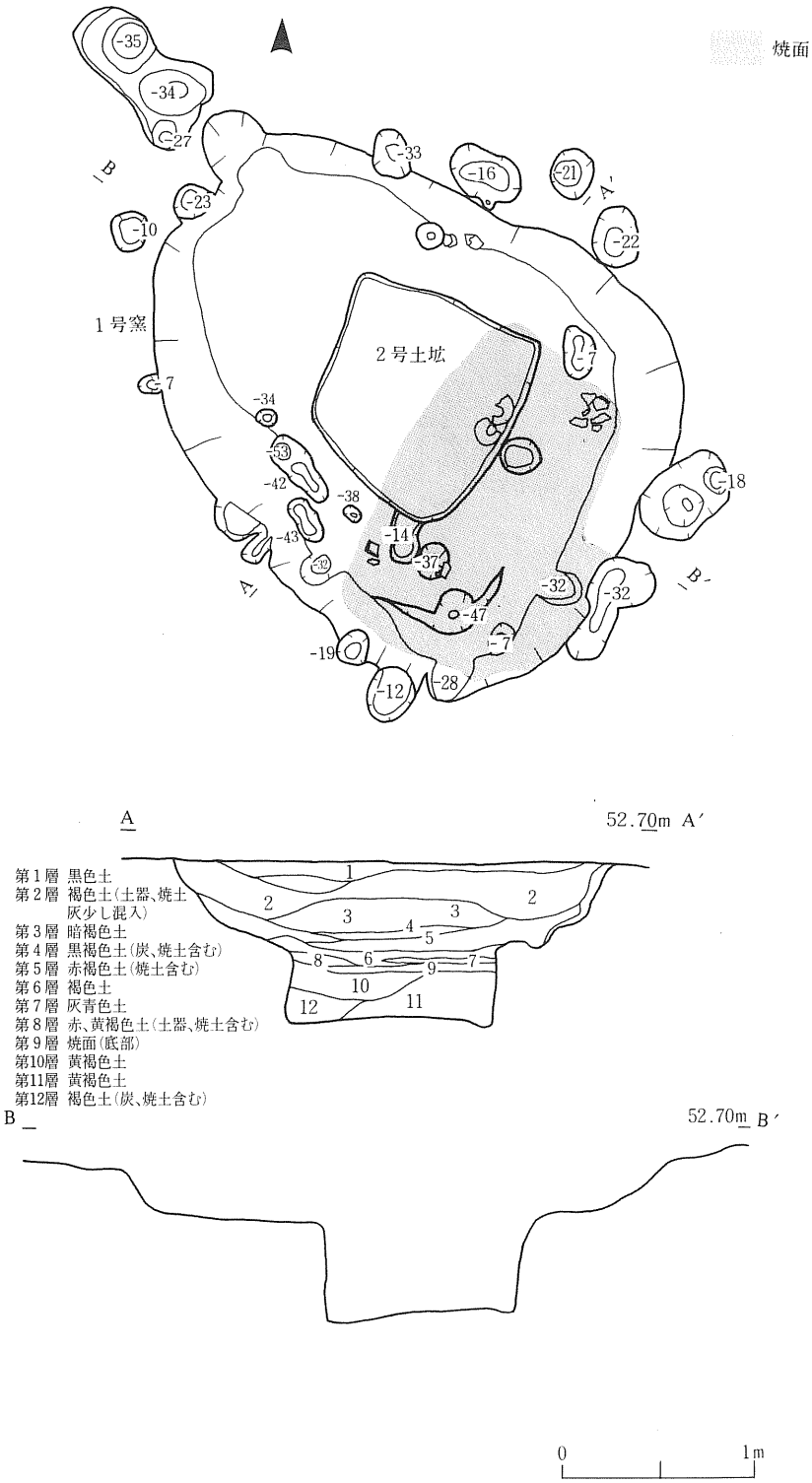
１号窯跡（第６図）

調査区の中央部で検出した。

プランは、長軸2.9m、短軸2.2mの北西に長い楕円形を呈する。窯底部までの深さは40～50cmで鍋底状に掘り込まれている。底部下には２号土坑があり、断面観察の結果土坑を埋めてから本窯跡を構築していることが判明した。覆土は全体に焼土、炭化物が多く混入するが、黒色土、黒褐色土黄褐色土が主である。底部の一部は赤く焼け堅くなりその上層に焼土・炭化物の層、さらに灰青色土がうすく堆積している。焼土、炭化物が含まれる割に焼けた面が少なく、南東部の底部、側壁が堅く焼きしまり「焼面」をなしている程度である。遺物は覆土から多量に出土したがブルドーザーによってふまれており細片が多く復元できたものは少ない。

出土遺物（第10図2･3･5）

土師器



第６図　１号窯跡，２号土坑

５は口径３cmの底部の厚い手づくねの土器である。

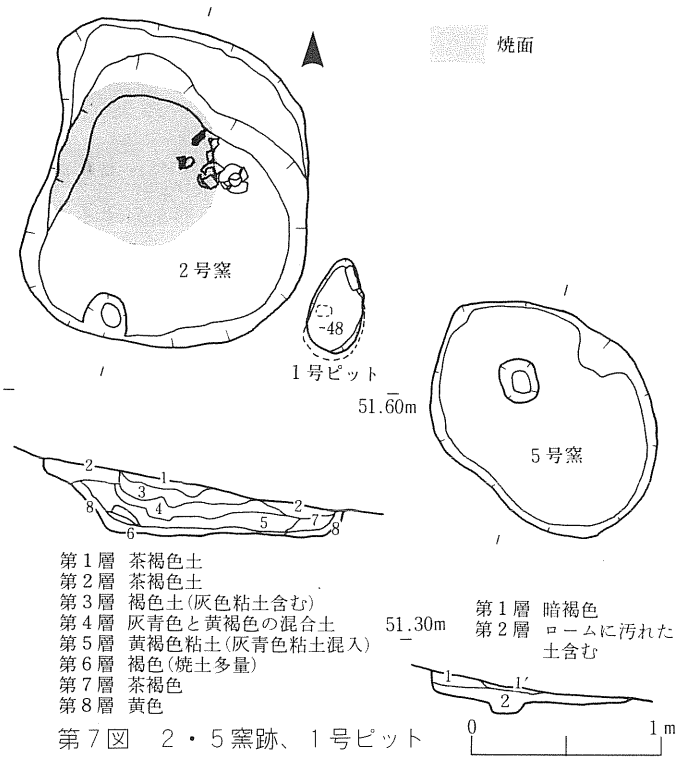
赤褐色土器

２・３は覆土から出土した。いずれも底部切り離しは回転糸切り無調整である。

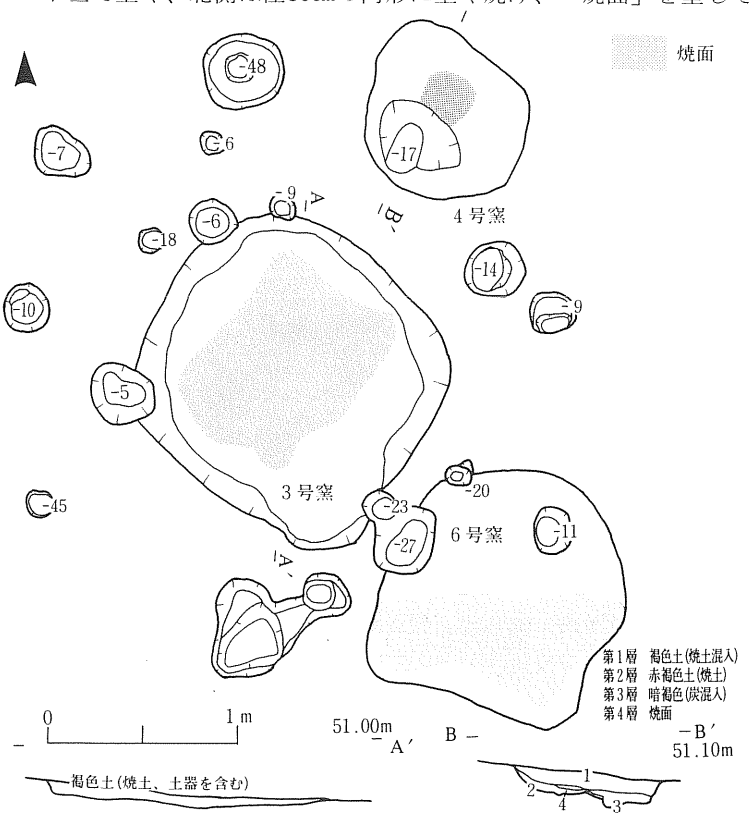
２号窯跡（第７図）

調査区の南西部で検出した。北から南にかけて削平されている。

プランは、長軸1.7m、短軸1.4mの楕円形を呈する。窯壁は遺存の良好な北側で高さ35cmを計り、斜めに掘り込まれる。覆土は、褐色土、茶褐色土が主で灰青色、黄褐色土が混入している。最下層には焼土・炭化物の層がある。窯底は平坦で堅く、北側は径80cmの円形に堅く焼け、「焼面」を呈している。



第７図　２・５窯跡、１号ピット



第８図　３・４・６号窯跡

出土遺物（第10図６・７）

赤褐色土器

６・７は窯底部直上から出土した台付の坏である。底部と周縁にナデを施している。切り離しは不明である。

３号窯跡（第８図）

調査区の南西部で検出したが削平され、上部はほとんど壊されている。

プランは長軸1.0m、短軸1.5mのほぼ円形を呈する。遺存する壁高は５cm程である。窯底部は堅く、中央部が0.8×1.0mの範囲で「焼面」をなしている。

４号窯跡（第８図）

調査区の南西、３号窯跡の北で検出した。上部は削平されている。

フランは径0.8m 程の円形を呈する。床は堅く、中央部は特に赤く焼け「焼面」をなしている。

５号窯跡（第７図）

調査区の南西、２号窯跡の南東部で検出した。上部は削平されている。

フランは、長軸1.4m 、短軸1.0m の楕円形を呈する。壁はほとんどが壊れているが、遺存の良好な北壁で高さ約10cm程である。底部は平坦でしまっているが、焼土はみられない。

６号窯跡（第８図）

調査区の南西３号窯跡の南東部で検出した。大部分は削平され、わずかに皿状に残っている。

フランは、径1.4m のほぼ円形を呈する。底部は堅く、南半分は赤く焼きしまり「焼面」をなしている。

７号窯跡（第９図）

調査区の西側で検出した。８号窯跡、竪穴と重複している。断面観察の結果８号窯跡を切り、竪穴に切られていることが判明した。

フランは、長軸で３m 以上、短軸2.2m の楕円形を呈する。壁高約55cmで底部からやや斜めに立ち上がる。覆土は茶褐色、褐色土、黄褐色が主体で、最下層には厚く焼土、炭化物が堆積している。底部は平坦で堅く焼け「焼面」を呈する。底部から５cm程の高さまでは壁も焼けており、特に東壁は全面に焼けている。

出土遺物（第10図27～32）

覆土、底部から土師器坏、甕、赤褐色土器が多数出土した。細片が多く復元できるものは少ない。

土師器

27・28は覆土から出土した内黒の坏である。いずれも回転糸切り無調整である。体部は横方向、底部は放射状にミガキを施している。

赤褐色土器

29・31・32は覆土から出土した坏である。29・31は回転糸切り無調整である。31は口縁部が外反する。30は底部から出土した。磨滅が著しく、切り離しは不明である。

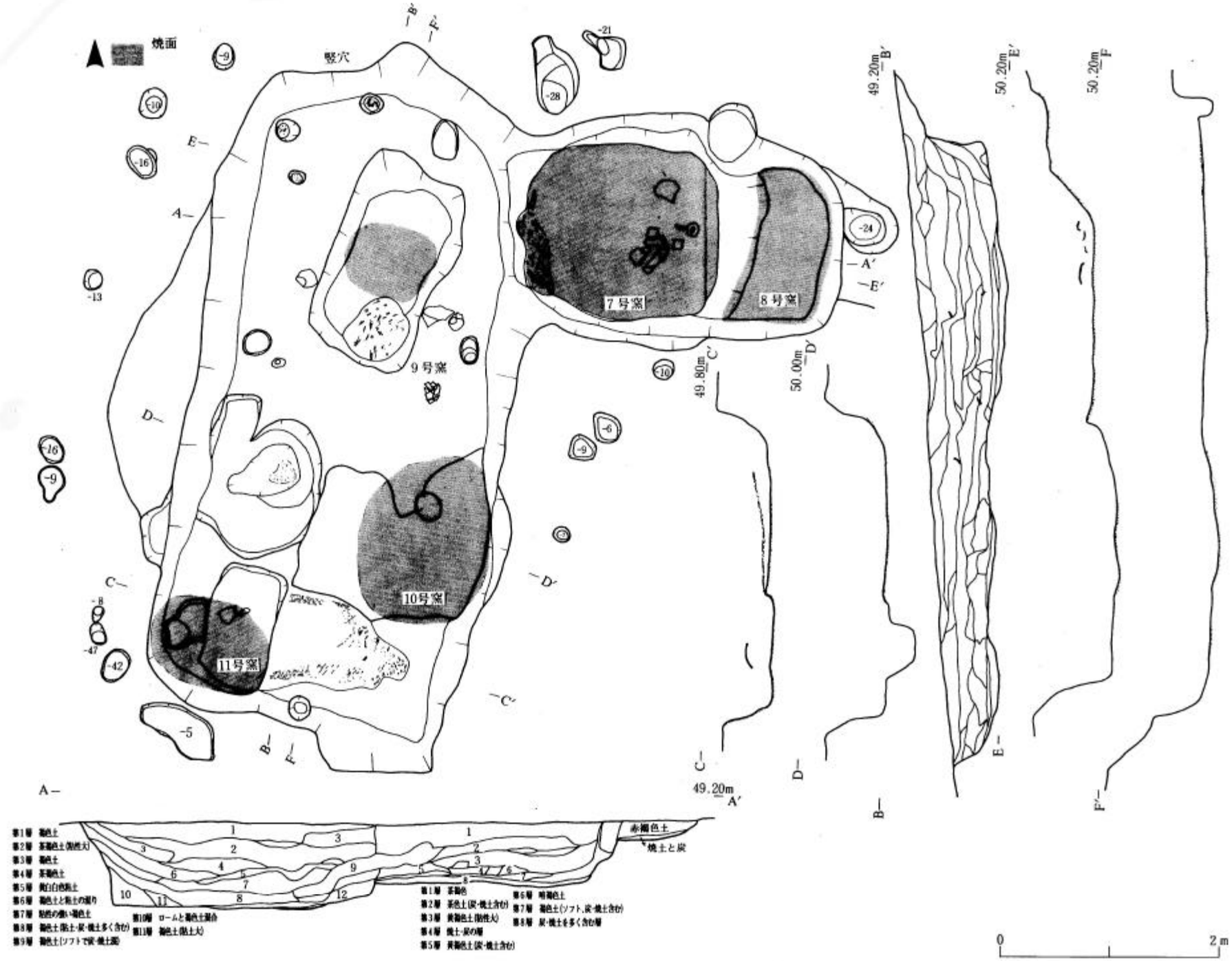
８号窯跡（第９図）

調査区の西側で検出した。７号窯跡と重複しており、切り合いから本窯跡が古いことが判明した。

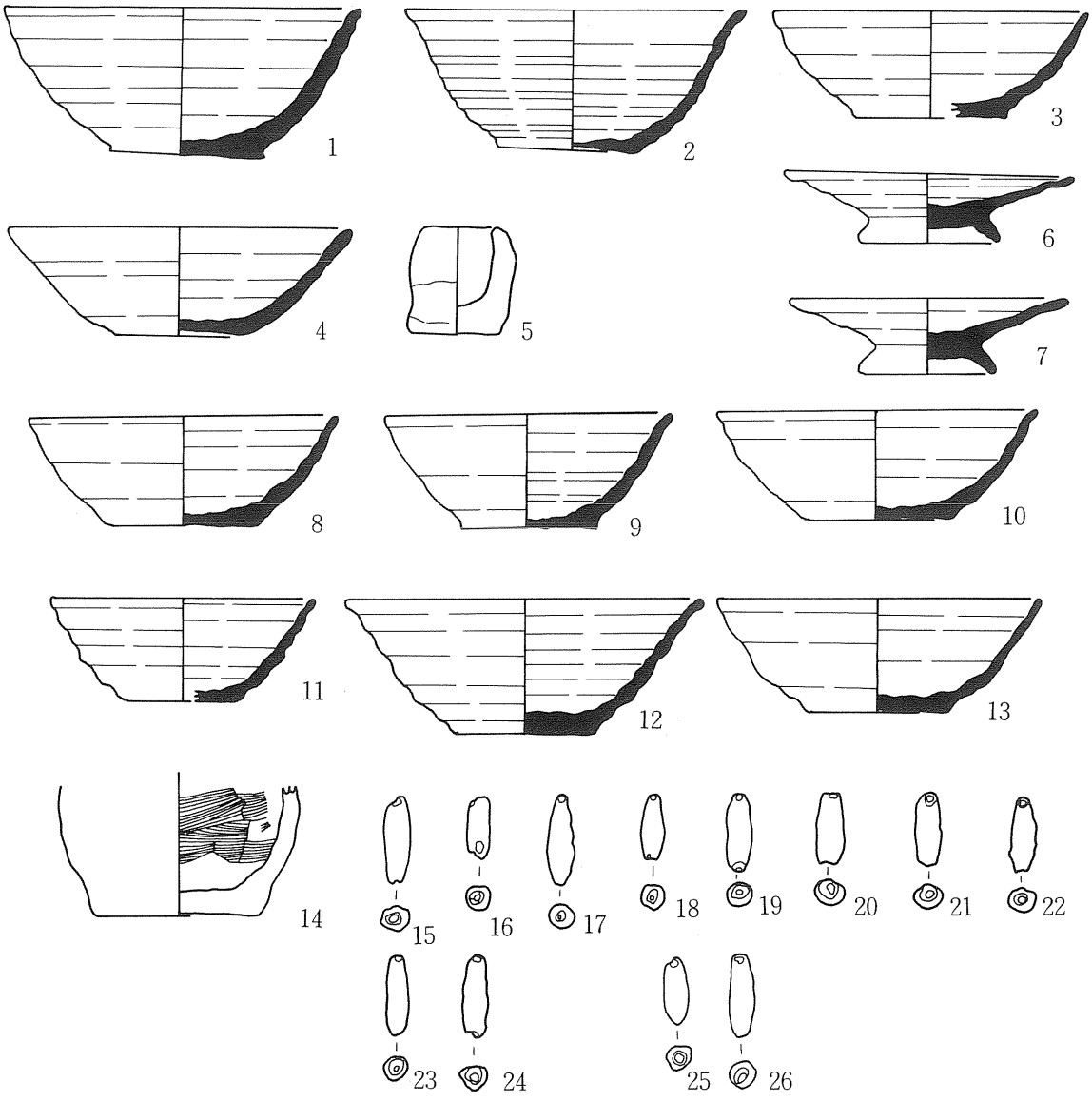
フランは、南北約1.8m 、東西は不明であるが遺存形態から推定すると楕円形を呈していたと思われる。底部までの深さは約18cmで壁はゆるく立ち上がる。覆土は赤褐色土、下層は焼土、炭化物層である。底部全面と床の一部は赤く焼け、「焼面」をなす。覆土から赤褐色土器の細片が多く出土したが復元不能である。

９・10・11号窯跡（第９図）

９・10・11号窯跡は、調査区の西側で検出した。長軸６m 、短軸2.6m の南北に長い竪穴を掘り込



第9図　7・8・9・10・11号窯跡



2・3・5　1号窯跡
6・7　2号窯跡
8～24　3号住居跡
25・26　1号土坑
1・4　2号土坑
27～32　7号窯跡

第10図　遺構内出土遺物

んで、その中に構築されるものである。

9号窯跡：プランは長軸1.9m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈する。底部は皿状に掘り込まれ、中央部が赤く焼けている。南側に炭化物が多くみられる。

10号窯跡：プランは長軸1.5m、短軸1.2mの東西に長い隅丸長方形を呈する。底部は平坦で径1.5mの範囲は「焼面」をなす。また、東側の壁の一部も「焼面」を形成している。

11号窯跡：プランは長軸2.3m、短軸1.2mの隅丸長方形を呈する。底部は浅く皿状に掘り込まれる。西半分と壁は赤く焼け、「焼面」をなす。東側には多量に炭化物が堆積している。

この竪穴の北壁下にピットが検出されているが窯に関連するのか不明である。

出土遺物（第12図1～6）

竪穴覆土から多量に土師器甕、赤褐色土器が出土したが細片が多く復元できるものは非常に少ない。

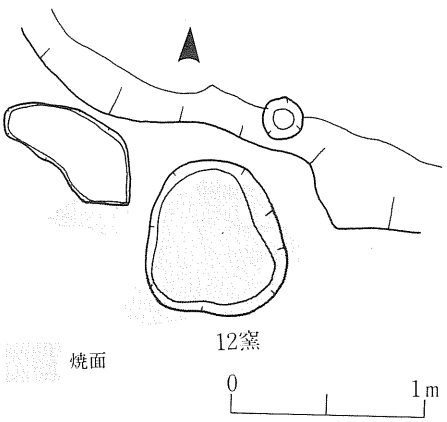
赤褐色土器

1は切り離し不明、2～6は回転糸切り無調整の坏である。2は底部近くから出土した非常にいびつな土器である。

12号窯跡（第11図）

調査区の西、竪穴の南で検出した。削平され上部は壊れている。

プランは、径0.75mの円形を呈する。底部は赤く焼け、「焼面」をなしている。



第11図　12号窯跡

1号土坑（第5図）

調査区の中央南寄りに3号住居跡と重複して検出された。1号土坑を埋めてから3号住居跡を掘り込んでいることから本土坑が古いことが判明した。

プランは、長軸2.65m、短軸2.2mの東西にやや長い方形を呈する。若干内傾ぎみに掘り込まれている。深さは約1.0mである。東コーナー部の底部に近い壁は一部焼けて赤変している。

出土遺物（第10図25・26）

出土遺物は底部付近から土師器甕の小破片、埋土から土錘が出土した。

土錘

径3㎜程の孔を有する小形のものである。色調は肌色を呈する。

2号土坑（第6図）

調査区の中央部で1号窯跡と重複して検出された。1号窯に埋められていることから窯よりも古い。

プランは、長軸1.1m、短軸1mのほぼ方形を呈する。遺存する壁高は約40cmで垂直に掘り込まれ

ている。覆土は、黄褐色土、褐色土が堆積し、下層に焼土、炭化物が混入する。

出土遺物（第10図１・４）

赤褐色土器

１・４は覆土から出土した完形に近いものである。底部は回転糸切り無調整である。いずれも赤橙色を呈し、磨滅している。

不明落ち込み（第13図）

調査区の西側で検出した。北側は、昭和51年に調査されている。北から南に削平され、浅い落ち込みとなっている。

プランは、南北3.5m、東西４m以上の長方形を呈するようである。規模や他の住居跡の方向と比較すると住居跡の可能性もある。

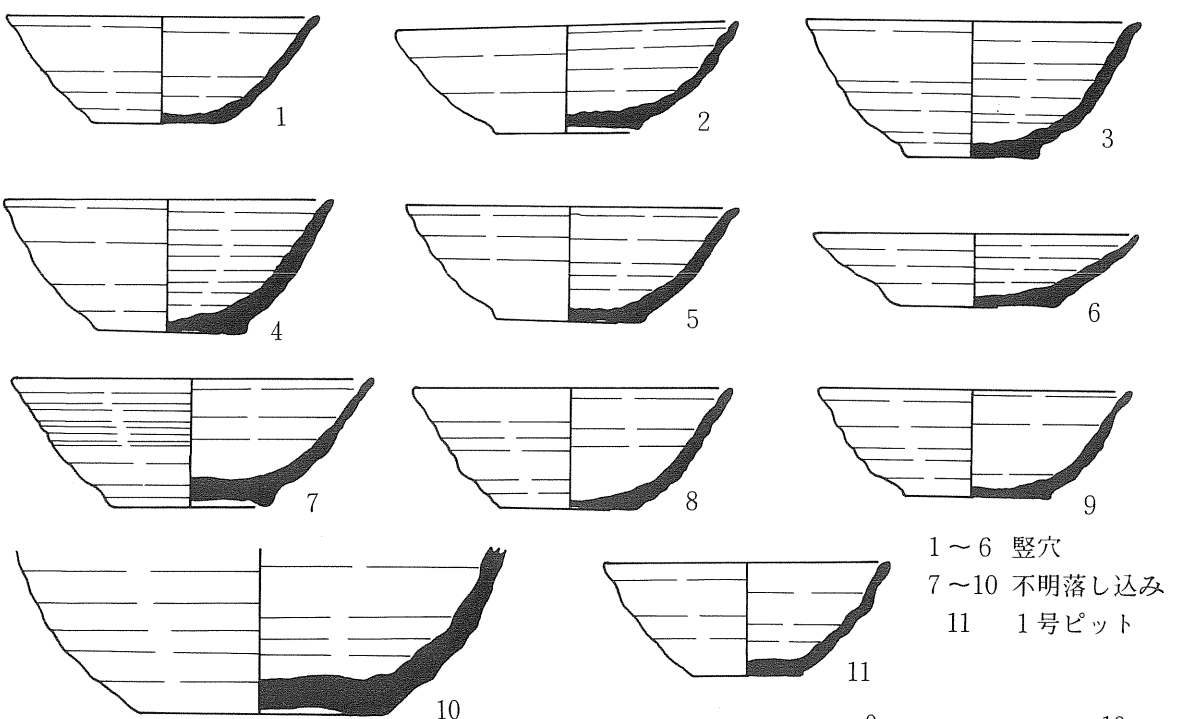
出土遺物（第12図７～10）

土師器

10は落ち込み内のピットから出土した。上部は欠損する。底部切り離しは不明である。焼成良好である。

赤褐色土器

７～９は落ち込みピット内から出土した。７は台付坏で、糸切り後周縁にナデを施す。８・９は坏で８は切り離し不明、９は回転糸切り無調整で焼成良好である。



第12図　遺構内出土遺物

まとめ

調査の結果、３軒の竪穴住居跡、12基の窯跡、土坑３基、それに土師器、須恵器、赤褐色土器、土錘などが発見された。

竪穴住居跡は、規模は異なるがほぼ方形のプランを呈し、同一方向にある。カマドは方向が異なるが１・３号住居跡は屋外に２m 程突出する煙道をもつ。また住居跡の重複はなく、出土遺物の相違もない。上記の点からこれら住居跡は同時期の可能性がある。

窯跡は12基検出されている。昭和51年度の「野形遺跡発掘調査報告書」から引用すれば「……内部には土器が混入しており、構造、規模等から赤褐色土器の焼成施設と考えられる。……しかし土器（一部土錘も焼成する）焼成を目的としている点では「窯」と称してもさしつかえないものと考えられる。」とある。今回調査したものもまったく同様の遺構であり、その点からも窯として捉えることができる。

窯跡は、遺跡の南側に多く検出される。後世に削平されているがもともと南斜面である。今回検出した窯跡は、規模、構築方法から３タイプに別けられる。１．比較的大きな楕円形を呈するもの（１号窯跡）。これは他の窯跡と立地場所も異なる。２．２m 前後の円形、楕円形を呈し、鍋底状のもの（２～８、12号窯跡）。３．長方形の竪穴を掘り込み、内部に窯を構築したと思われる（９～11号窯跡）ものがある。３は前回の調査ではみられなかったものである。竪穴と窯とに重複も考えられたが竪穴側壁が窯壁として使用され、部分的に赤変していることから竪穴より古いものではないこと、また土層断面の観察結果、窯壁もなく、覆土は一時期に埋められたものである。これらのことから竪穴は窯跡を複数構築するために掘り込まれた可能性が強い。

以上３タイプの窯跡も焼土、炭化物のあり方からみると焼成方法は同一の様である。すなわち窯の側壁、底部は一部分しか焼面の形成はなく、他は全く焼けていないことや、断面観察から天井部崩壊土の存在もないことなどを考え合せると、円形、楕円形の穴を掘り、その全体、あるいは一部分を使用して野焼きのようにして土器を焼成したものと考えられる。

遺物について

遺物は、住居跡、窯跡から土師器、須恵器、赤褐色土器が出土している。特に窯跡からは赤褐色土器が多量に出土している。ほとんどすべてが坏、台付坏であり、回転糸切り後の再調整は全く施されないものである。秋田城跡、払田柵跡では底部およびその周縁に回転ヘラケズリ調整のある赤褐色土器が出土しており、特に払田柵跡では嘉祥２年（849年）の紀年名のある木簡と伴出している。本遺跡出土の二次調整の全くない土器はそれらよりも新しいものと考えられており、10世紀以降の時期が考えられる。

参　考　文　献

秋田考古学協会：「野形遺跡」昭和51年

秋田県教育委員会：「払田柵跡」昭和49～57年

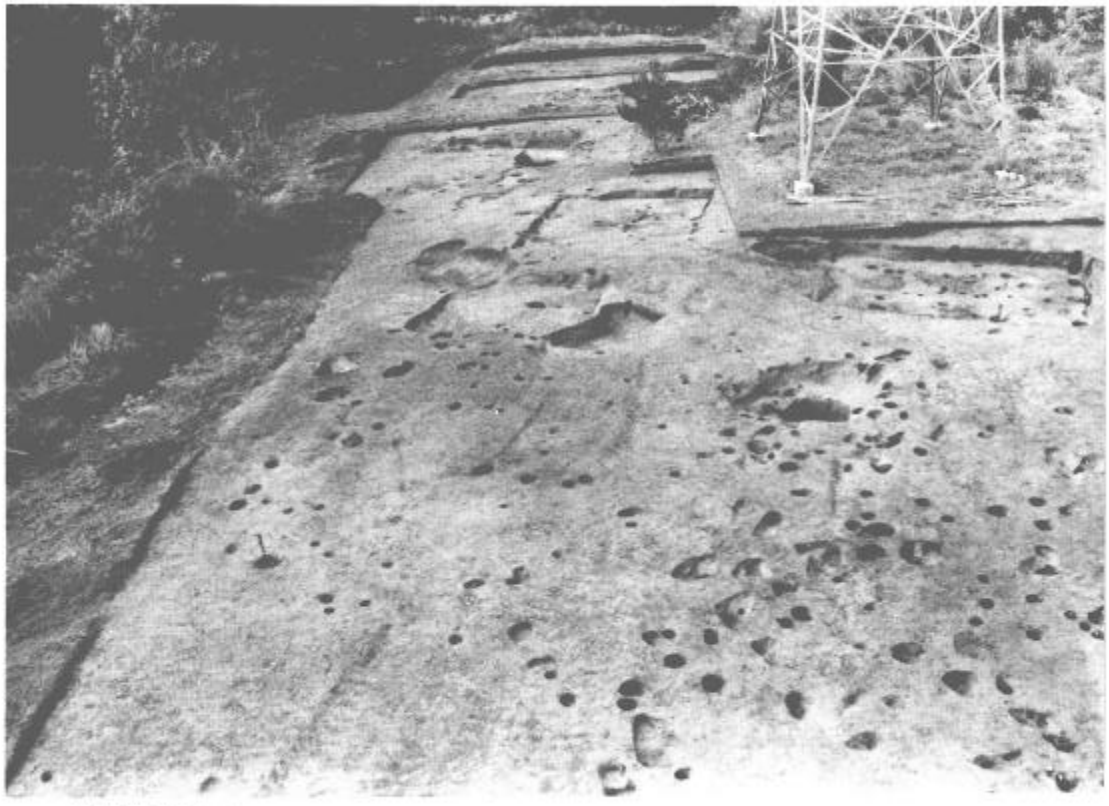
秋田市教育委員会：「秋田城跡」昭和50年

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　1983

昭和51年
発掘調査トレンチ
2号住居跡
1窯
2号土壙
1号土壙
1号住居跡
3号住居跡
竪穴
不明落ち込み
Pit 2
9窯
7窯
8窯
2窯
4窯
Pit 1
10窯
11窯
3窯
5窯
12窯
6窯
3号土壙
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
10m

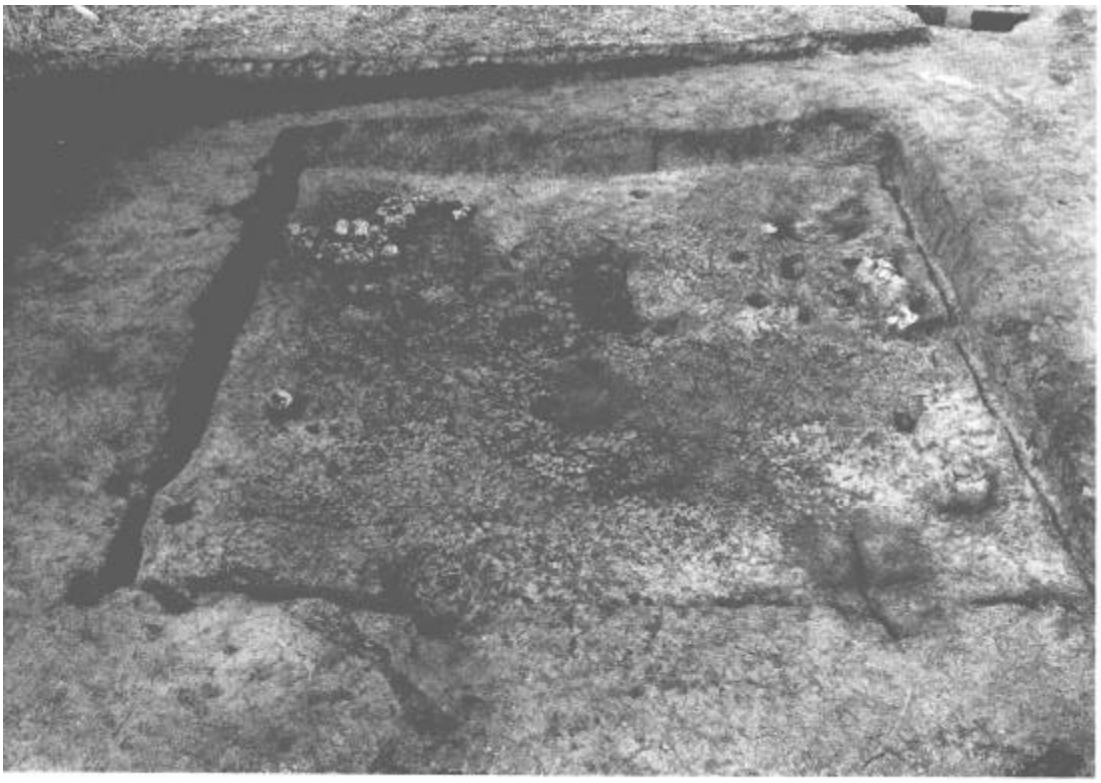
第13図　遺構配置図

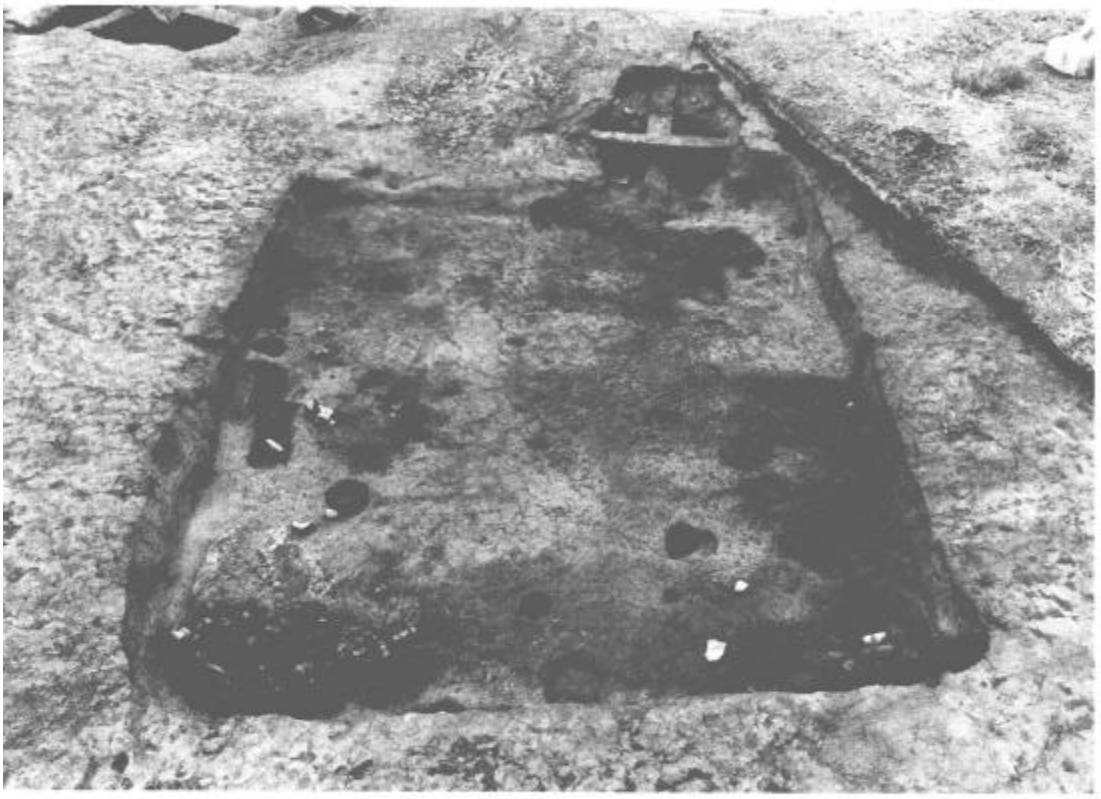
遺跡全景（西→）



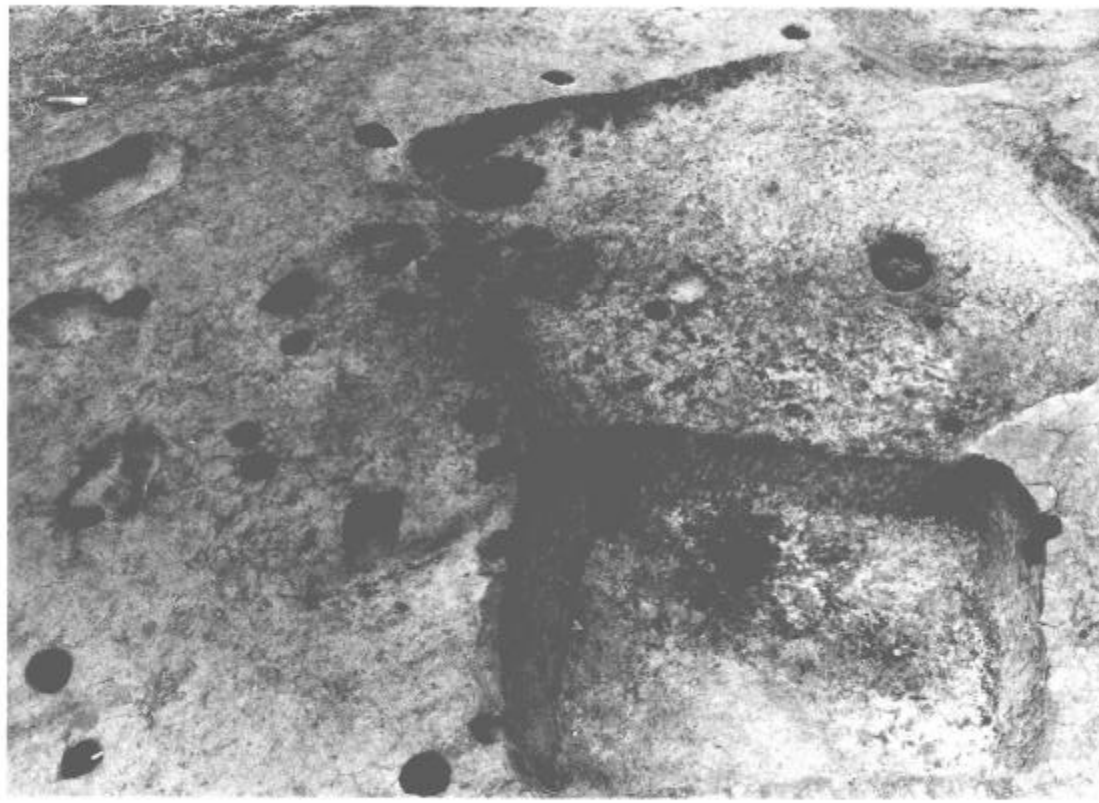
遺跡全景（東→）

図版 1



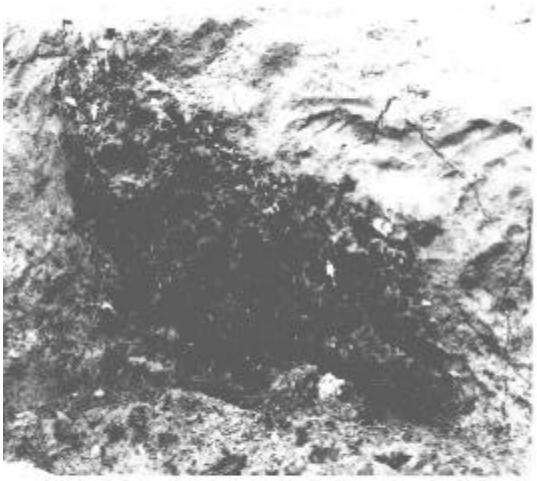


上：1号住居跡（南→）
下：2号住居跡（北→）
図版 2

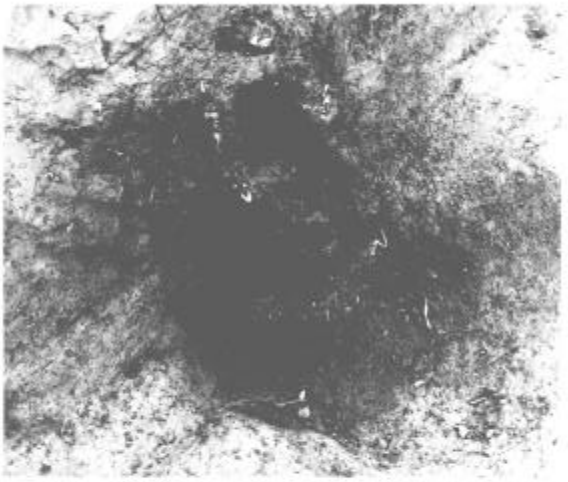


上：２号住居跡（北→）
下：３号住居跡と２号土坑（北東→）
図版３

1号住居跡
土器出土状態
（東→）



2号住居跡　炭化材（南→）



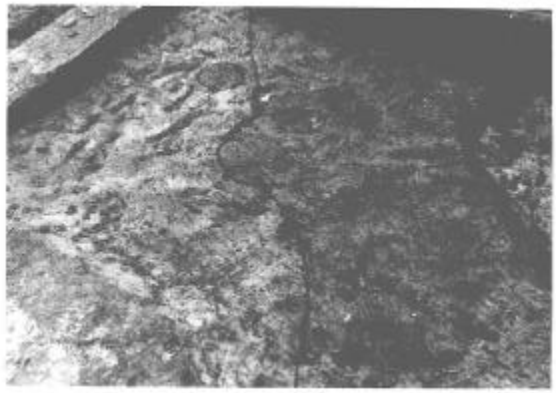
2号住居跡　炭化柱跡（南東→）

2号住居跡　炭化柱痕
（南→）

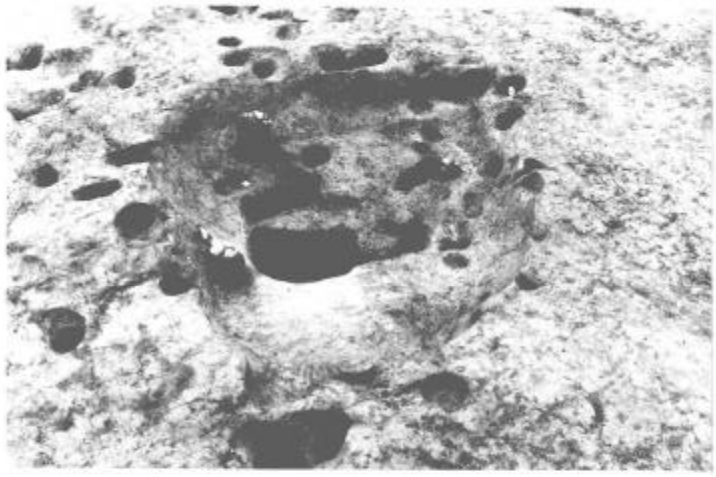
図版4

3号住居跡
カマド
(西→)

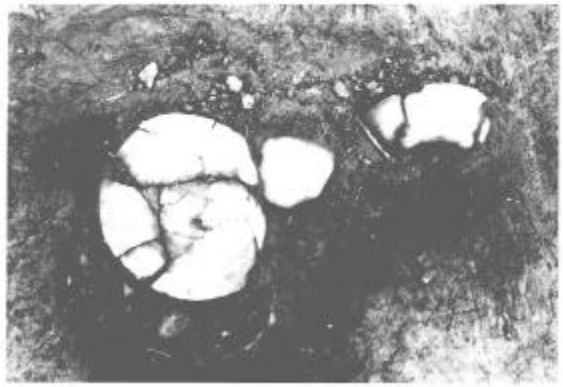
3号住居跡と2号土坑
切り合い
(西→)



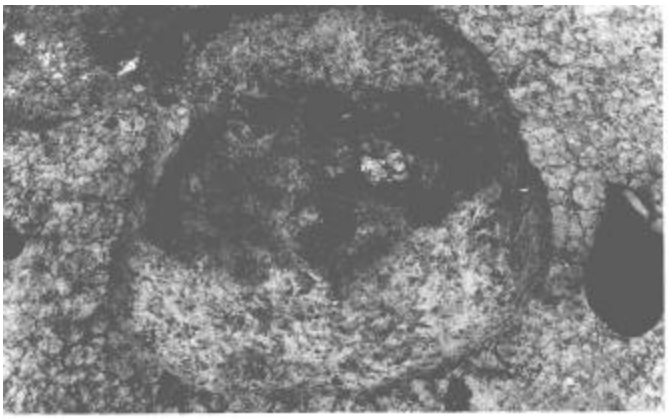
1号窯跡と1号土坑
(西→)



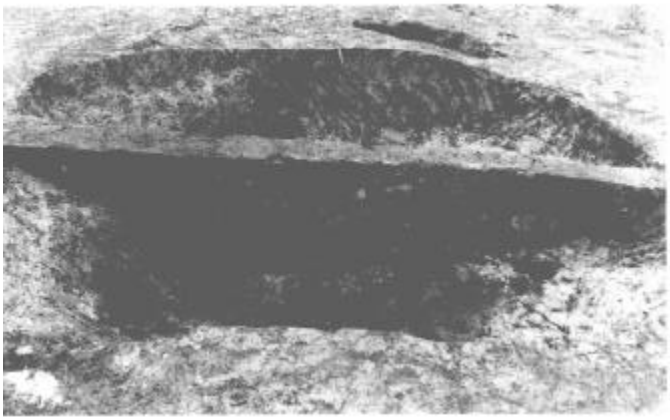
1号窯跡
土器出土状態
(南→)



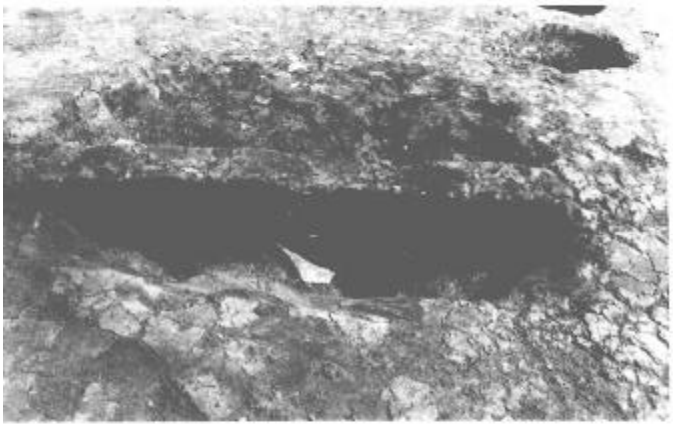
図版5



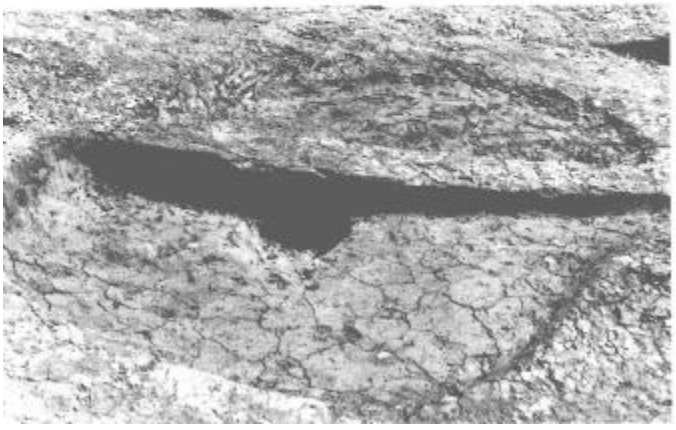
2号窯跡
（南→）



3号窯跡
（南→）



4号窯跡
（西→）

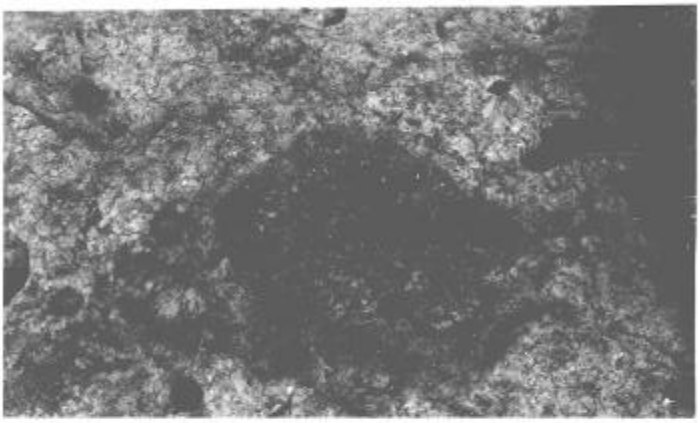


5号窯跡
（西→）

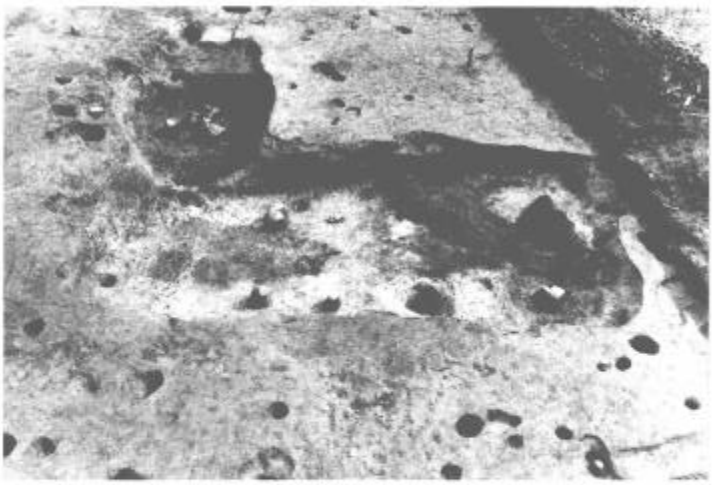
図版 6

5号窯跡
（南→）

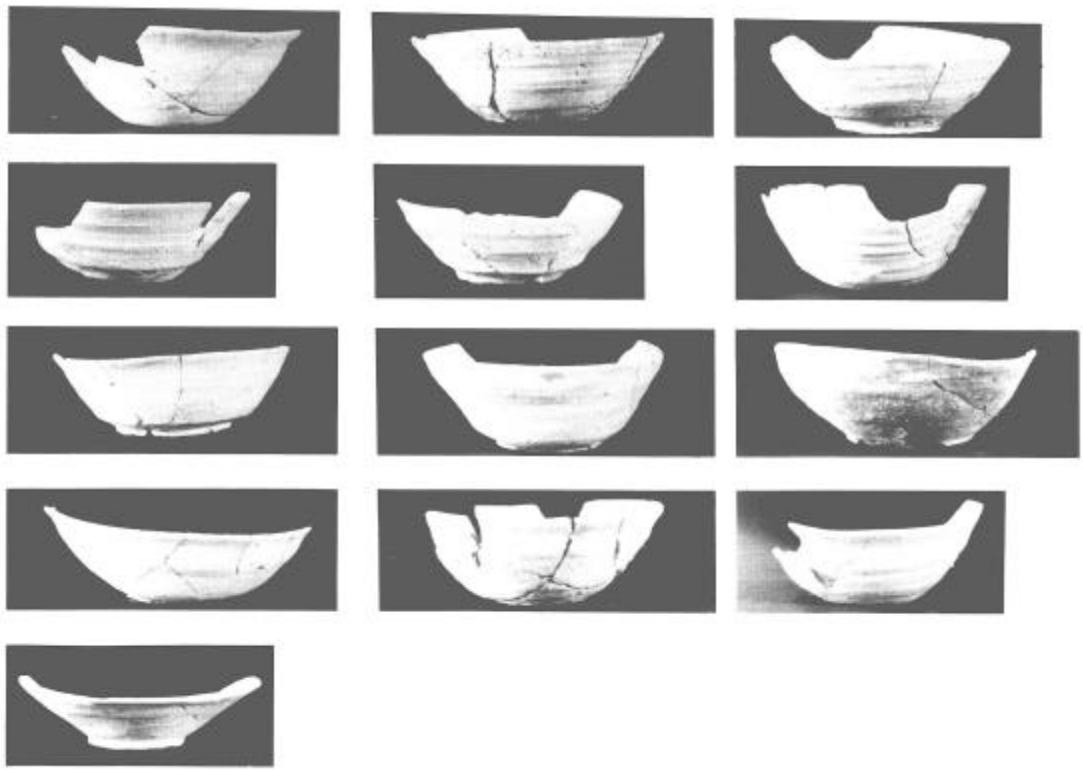
6号窯跡
（西→）



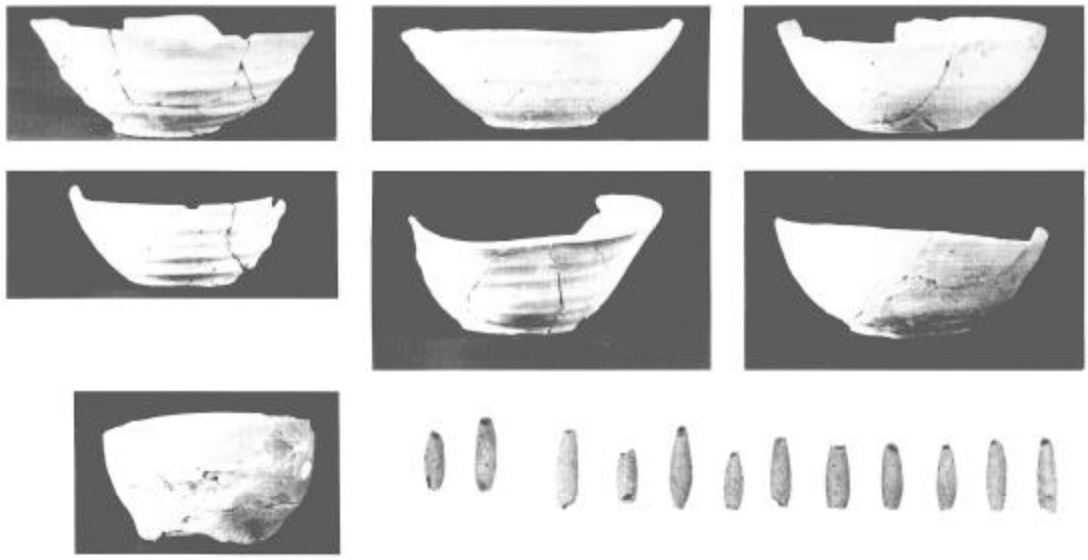
7・8・9・10・11号窯跡
（西）



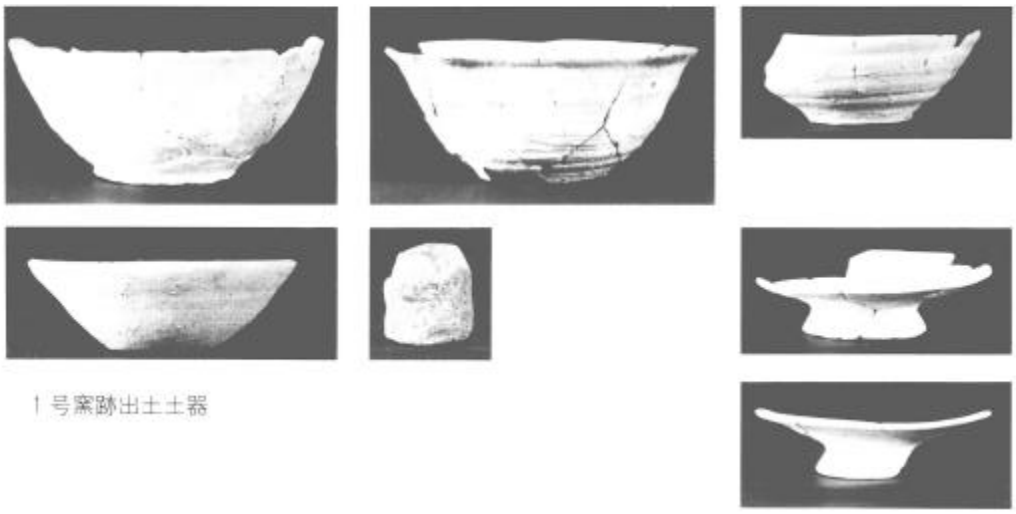
図版7



図版 8　1 号住居跡出土土器

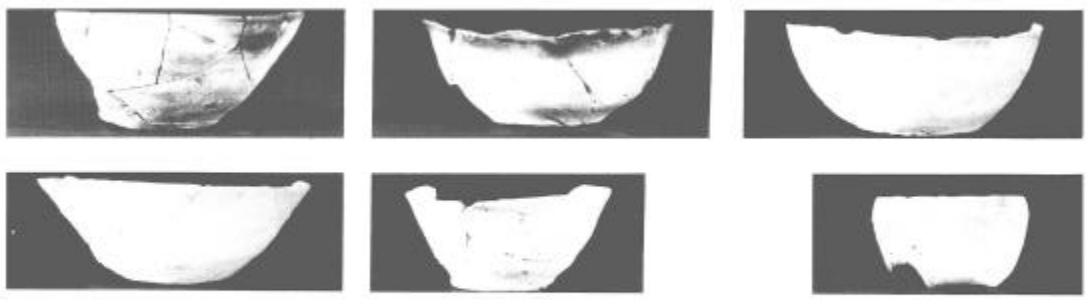


3号住居跡・2号土坑出土遺物



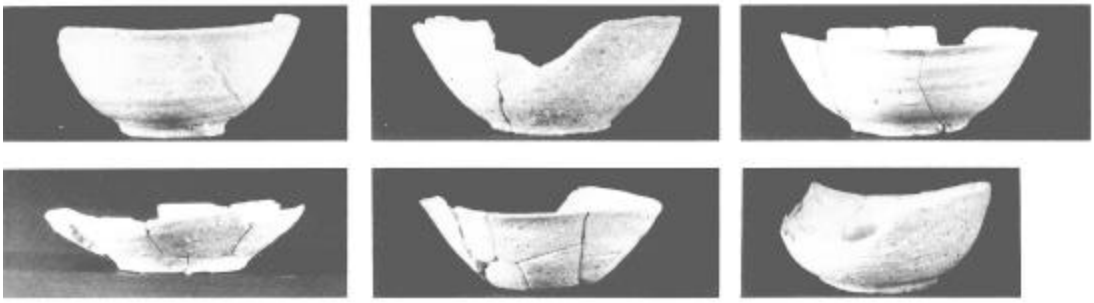
1号窯跡出土土器

2号窯跡出土土器

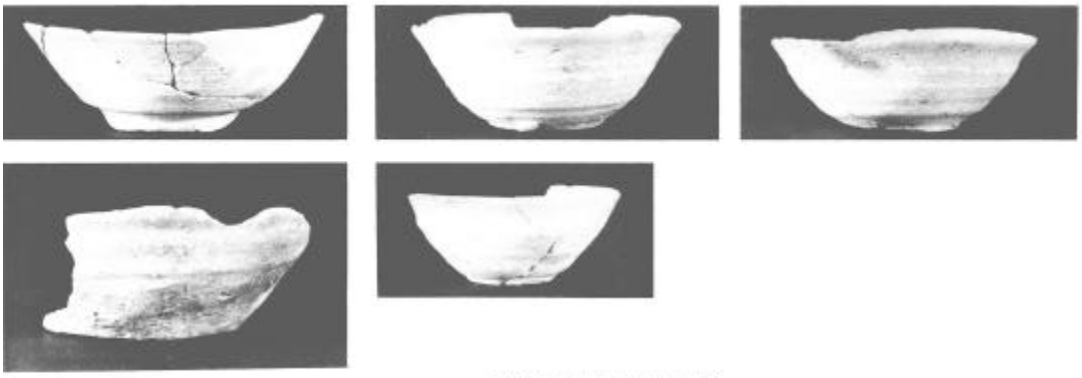


7号窯跡出土土器

図版9



竪穴出土土器



不明落ち込み出土土器

図版10

秋田市
秋田臨空港新都市開発関係
埋蔵文化財発掘調査報告書
昭和59年3月

発　行　　秋田市教育委員会

印　刷　　株式会社三戸印刷所

「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」

正　誤　表

頁	行	誤	正
162	1	坂の上E遺跡	坂ノ上E遺跡
	2	平担面	平坦面
163	1	掘に込み	掘り込み
	16	小　型	小　形
163	31	1　郡	1　群
164	2	2　類	2　群
165	7	坂の上F遺跡	坂ノ上F遺跡
217	26	浅鉢型	浅鉢形
	32	浅鉢型	浅鉢形
228	22	入組文	変形工字文
265	30	復恵器杯、土師器杯	須恵器坏、土師器坏
288	17	円筒上層B式	円筒上層b式